
ラヴィング

むぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラヴィング

【Nコード】

N7154X

【作者名】

むぎ

【あらすじ】

過去の罪滅ぼしのため、神官になろうと神学校に通うレオン・マグダラス。ルームメイトであり親友のジーク・フォンフィリアと張り合いのある毎日を送っていた。

ある雨の日、レオンは中庭の物音に気付き、倒れていた少女を匿う。少女・アイネは言葉が通じず、現代では誰も使えない黒い呪文を操った。直後、大司教がレオンの部屋を訪ね、アイネを連れ去ろうとする。

大司教の手から逃れ、神学校から逃亡した三人は、いつしか、アイ

ネを巡る計画に巻き込まれていく……。

2008年頃書いたものです。手元では完結しています。
pixivに掲載予定、自サイトに掲載済みです。

偉大なる創造主カタリナ 汝の慈悲深い愛で、我等を守り給え
我等を悲しみから救い給え 我等の栄えはいつも 汝と共にあら
んことを

雨が降っている。窓硝子にゆつくりと水滴の線が走る。窓の外には庭がある。濃い緑の葉をつけた木々があり、白い薔薇が咲いている。薔薇は、園丁のおじいさんが丁寧に世話をしているのをここからよく見かけていた。

窓硝子に、黒い髪と白い肌と薄い青色の目が映っている。前髪が目にかかって邪魔なので、そろそろ切りに行きたい。

耳を澄ますと、弱い雨だれの音と、衣擦れの音しか聞こえない。

日曜礼拝の後の、安息日の弛緩した空気を幸せというのかもしれないと、最近思うようになった。

足音が聞こえてくる。俺はこの部屋に一つしかない扉を振り返る。扉を開けて現れた赤毛の青年は、トレイにカップとソーサー、ポット、ミルクポットと砂糖瓶を乗せていた。茶色い目が、俺を見て笑った。

「またセンチメンタル？」

「別に、そういう訳じゃない」

赤毛の青年、ジーク・フォンフィリアはトレイの上の一式を、窓際に近い俺の机の上へ置いた。

十八歳で全寮制の神学校に入学して四年がたつが、一年前、ジークは一人部屋生活を満喫していた俺の部屋の半分を奪い取った。そんな部屋を半分奪い取った憎いやつは、なぜか今は俺の親友になっている。向こうがどう思っているか知らないが、少なくとも俺はジ

ークを気に入っている。

ジークは自分の椅子を引いてきて、俺の机の上で紅茶を注いでいた。いい香りが湯気と共に広がる。

「今日はケーキもらえなかった。残念」

ジークは心底残念そうな顔で言った。

「太るぞ。毎週食べてたら」

「でもケーキのないお茶会なんて、お茶会じゃない」

ジークの手元には既にミルクティーができあがっていた。授業のない日曜日は、紅茶を飲みながらぼんやりするのが、この部屋の習慣になっていた。俺も砂糖を入れないミルクティーを作って、一口飲む。湯気が立ち上っているのを見ていると、妙に落ち着く。

「何見てんの？」

ジークが俺の目をのぞきこんでくる。

「いや、平和だなと思って」

「嵐の前の静けさってやつだろ。そろそろきな臭い話が聞こえてくるよ」

ジークは窓の外を見た。隣国との休戦協定の期限が迫っているからだろう。隣国は小さなこの国を自国の領土に加えようと、五十年前から侵略戦争を繰り返している。休戦協定が結ばれて、今年で丁度十年だ。休戦になった理由は分からないが、そろそろ戦争が始まるのは確実だ。世間に疎いこの場所にいても、開戦が近付いている気配は何となく分かった。

「まあ数カ月後の心配より、一週間先の心配をしないとな」

ジークは俺の机の上の教科書を勝手に開く。そうなのだった。定期考査一週間前なのだ。一気に気分が重くなる。

「俺は実技で点稼ぐから、いい」

教科書から目をそらす。

「そんなこと言って、どうせちゃんと勉強するんだろ。というか、実技でカバーできる程実技の比重ないぞ」

厳しいいつっこみが入る。確かに実技の比重はそんなに高くない。

一応、勉強も嫌々ながらするつもりだ。神学校に入った目的を忘れる訳にはいかない。

「実技って今回、何？」

ジークは教科書を見ながら言う。

「生徒同士のサドンデス」

ジークは遠くを見るように茶色い目を細めた。

「ああ。レオン勝ちそうだな」

実技は魔法のみを使用した生徒同士のトーナメント戦だ。と、さつき廊下で会った司祭に聞いた。武器は使えないし、肉弾戦も駄目だが、魔法でなら何をしてもらいたい。武器を作り出してもいいもつとも、現代でそんなことができる人間は一人もないけれど。神官レベルなら基本属性の攻撃呪文が扱える程度だ。つまり、体さばきと攻撃呪文での勝負になる。

勝つ自信はある。なぜか俺は現代人の中では魔術師レベルの魔法センスがあるらしい。魔術師協会から勧誘が来たこともあったが、断った。俺がなりたいたいのは魔術師ではなく神官なのだ。

「まあ実技はレオンにまかせておいて、と」

教科書に目を落としたままのジークの横顔を見る。耳に琥珀色の小さなピアスが見えた。

目の前には俺と同じくらいの体格の男が立っている。間合いは約三メートル。クラスメイトだが、名前は忘れた。というか覚える気がないので覚えていない。茶髪で、割とクラスの中心的存在だったような気がする。気がするが、俺の情報は我ながら当てにならないので、実は違うかもしれない。

俺達を囲むように、クラスメイトと司祭が立っている。その間には玉虫色の半透明の壁がある。魔法が暴発した際に備えた防御壁だ。小雨が振り出していた。運動場は屋根がなく、ただの広場なので大雨になったら面倒だ。男が口を開く。

「お前と戦えて嬉しいよ。前回は決勝まで進めなかったから」

俺は曖昧に返事をした。前回のことなど覚えていない。数秒後に始まる勝負へ向けて、右手を握って、開く。

「始め」

司祭の声がはつきりと響いた。男も俺も動かない。

『透の空中 風 塵』

俺は古代語の呪文を紡ぐ。男は動いたが、呪文の方が速い。

『以って我が手に巻き起これ アリス』

男の足元に向けて撃った。力の流れが右手に集まって、抜けていく感覚が分かる。撃ってから、今日は地面が濡れているから、あまり目くらましの効果がなかったことに気付く。

『透の空気 雷 塵』

男は顔をかばいながら言う。やはり雨だから、そう来るのが賢いだろう。男の手の向いた方から横に跳ぶ。

『以って我が手に迸れ ワブラ』

『透の水面 水 気 以って我が手に溢れ出せ オスタ』

感電の嫌な音に、防御壁の向こうのクラスメイト達がざわめく。

男は顔をかばいながら、逃げた俺の方をしっかりと狙っていた。呪文が間に合わなくて相殺できていなかったら危なかった。早口の練習はしておくものだ。名前は分からないが、中々強い。

「早口だな」

「練習したからな」

男は笑った。

「実技で一番つていうのは伊達じゃないんだな」

「それはどうも」

『透の空中 風 塵』

男は、不敵なという表現がぴったりの笑みを浮かべながら、呪文を口にする。避けるか、受けるか。

『以って我が手に巻き起これ アリス』

男は手を自分の真下に向けて撃った。風の力で男の体が上へ浮かぶ。俺は目を細める。

『透の空気 雷 塵』

頭上から男の音がする。まずい。俺は口を開く。

『透の空中 飛 空 風』

『以って我が手に進れ ワブラ』

『以って我が身に舞い降りれ スイル』

体が宙に浮く。男の手の先から逃げる。俺が元いた地面へ、雷の塊が落ちた。

『透の空気 雷 塵』

俺は宙に浮いたまま、口を開く。男は目を見開いて、落ちていくままだ俺を見上げる。

『以って我が手に進れ』

俺は不敵に笑った。

『ワブラ』

地面へ向けて、雷の呪文を撃った。男の痛々しい悲鳴が上がる。

直撃させなかったのは俺なりの優しさだ。きつと濡れた地面が電気をよく通してくれたことだろう。男は地面に膝をつく。

「そこまで」

司祭の音が響く。男は防御壁の向こうの司祭を見る。

「先生、まだ終わっていません」

「膝をついたら負けだと言っただろう。試験でそんなに重体になられても困る」

男は何か言いたそうに司祭を見ていたが、浮いている俺を見上げた。「分かりました」

俺は地面に降りた。飛んでいるのはかなり疲れるのだ。クラスメイトから、拍手が起こった。「またレオンが一番か。つまんないな」「でも飛べるんだから当然な気がするけど」スイル（飛行呪文）が使えるのは俺のささやかな自慢だ。努力の賜物だと是非、賞賛してほしい。

俺と男は防御壁の外に出る。男の足取りはおぼつかないが、命にはまったく別状はなさそうだ。

「それでは、今回の優勝者はレオン・マグダラスとする」

周りのクラスメイトから拍手が起こる。遠くにジークの姿を見つめる。「やっぱりな」笑いながら、ジークの口はそう言った。

全身に軽い疲労感を感じながら部屋に戻ると、ジークはいなかった。そういえば選択授業があるのだった。今さっきの実技について感想やら意見を聞きたかったのに残念だ。

いつの間にか、雨が窓を激しく叩いている。景色は雨ににじんで見えない。俺は窓際の勉強机に向かった。机の上に積みれっぱなしの教科書の地層を発掘して、目当ての本を開く。

窓の外が光った。重い物が落ちる鈍い音がして、窓に目を向ける。雷だろうか。けれど、変な音が、した。俺は窓を叩く雨の隙間から外をのぞく。いつもの木と、薔薇以外に何か見える。部屋を出て、玄関で傘を取って庭へ向かう。

雨の匂いの中に土の香りが濃くなってくる。俺は足を止めた。

白薔薇の花壇の中、舗装された石畳の上に、人が倒れていた。銀色のおかっぱ頭に、白い肌、奇妙な赤い模様が入った白い法衣、側に落ちた白い帽子。目は、閉じている。雨が白い肌を絶え間なく叩いている。近付こうとして、脚が震えているのに気付いた。傘に入る距離まで近付いて、人の側にしゃがみこむ。平坦な胸がゆっくり上下しているのを見て、体の力が半分抜けた。生きてはいる。ここまで来てしまったからには、放っておく訳にはいかないだろう。傘を肩にかけて、恐ろしく顔立ちの可愛い少年の脚と背を抱えて持ち上げた。とても軽かった。

廊下に水滴を落としながら部屋まで来たが、そのままベッドに寝かせる訳にはいかないことに気付く。少年を床に降ろして、自分のパジャマを持つてくる。サイズが絶対に合わないが、仕方ないだろう。自分の法衣に似た、模様の入った白い服を脱がしていく。

首筋が熱くなった。胸元の隠しボタンを外していた手が止まる。

少年は、胸のふくらみを白い布でぐるぐる巻きにした、女の子だ

った。

「で、自分のベッドに寝かせた、と」

話を聞き終わったジークが言う。窓の外は暗くなり始めているが、雨はやむ気配がない。女の子は二段ベッドの下で眠ったままだ。

「役得だったな」

ジークは薄笑いを浮かべる。体が熱くなる。

「仕方ないだろ。びしょ濡れのまま寝かせればよかったっていうのか？」

「冗談だつて」

ジークは笑った。

顔を見た時点で、女の子だと気付くべきだったのだ。でも、どちらにしろ着替えさせなければいけなかったと気付いて、変なジレンマに陥った。

「このまま目が覚めなかったら、どこで寝るの？」

「床で寝るからいい」

ジークはたいして興味がなさそうに「ふうん」と言った。

「行き倒れかなあ。でも敷地内で、しかも女の子だしなあ」

確かに疑問はたくさんある。けれど、本人が目覚まさないことには何も分らない。ここは女人禁制だから、あまり長くかくまっておく訳にもいかないし、俺とジークの精神衛生上もよろしくないし、何より俺はずっと床で寝るのは嫌だ。

ジークは椅子から立って、女の子をのぞきこむ。

「あ、起きた」

俺は椅子から立ち上がる。女の子は驚く程の機敏さで上体を起こした。開いた目は、宝石のエメラルドに似ていた。パジャマはやっぱりぶかぶかで、俺は白い胸元から目をそらす。

「起きぬけに悪いんだけど、色々聞いてもいいかな」

ジークが言う。エメラルドの瞳が驚いたようにジークを見上げる。

「ジーク・フォンフィリア。こっちはレオン・マグダラス」

ジークは俺を指差す。エメラルドの瞳がはつきりと困惑する。

「君の名前は？」

『ここは、どこなの？』

女の子ははつきりと言った。ジークがこちらを見る。俺は女の子を見る。

「どこから来たの？」

ジークはもう一度尋ねる。女の子はジークを睨む。睨んでいる。確かに。

『言葉が分からない』

ジークは俺の方を向いて眉を寄せる。

「まいったな。隣国のスパイか？ でもこんな女の子がなあ」

ジークは自分で言って、自分で可能性を否定する。とりあえず、この女の子が外国人なのは間違いないようだ。

女の子は俺達から視線を外さず、ベッドから出てきた。気のせいかもしれないが、かすかな敵意を感じる。女の子は俺達を見ながら、部屋の中をゆっくり歩く。

「何か、誘拐犯と間違われてる？」

ジークが言った。

「そうかもしれない」

「まいったな」

ジークは頭をかく。

「分かった。少し落ち着こう。紅茶もらってくる」

ジークは言葉をはさむ隙も与えず、扉を開けて部屋を出ていく。

女の子が、扉へ向かって走る。

「駄目だ、君は」

慌てて女の子の手首をつかむ。見開いたエメラルドの瞳と目が合う。エメラルドの瞳が、細くなる。

『ワプラ』

女の子の手首をつかんだ手に痛みが走り、声を上げた。女の子は扉を背にして、俺へ手の平を向けていた。

細められたエメラルドの目が、こちらを見ている。野生動物のようだと思った。動いたら殺される。けれどその瞳を、とても美しいと思ってしまった。ライオンに殺される直前のシマウマは、この神々しさを感じて死んでいくのだろうか？

女の子が扉を振り返ると、扉が勢いよく開いた。女の子は痛そうな音と共に倒れて、悲鳴を上げた。

「ああ、ごめん」

ジークは何事もなかったかのように、トレイを窓際の俺の机へ置いた。紅茶の香りで体の力が抜けて、膝をついた。全身に汗をかいていたことに気付く。女の子は涙目になりながら、俺と同じ体勢でこちらを睨んでいる。痛みを感じて手を見ると、赤く腫れていた。

「ほら、お茶にするぞ」

ジークは早速、ティーカップに紅茶を注いでいる。俺は立ち上がって、自分の椅子に体を預ける。

『透の地 回 時 気 以って御身に降り積もれ ノゼリオ』

俺は自分の手に呪文をかけた。白い光が手を包む。痛みが少し引く。

「何でそんなに疲れてんの？」

ジークはミルクティーをかき混ぜている。

「ちよつと殺されそうになった」

「脱がしたのがばれたから？」

「違う」

思わず大声で叫んでしまった。ジークは笑う。

「ほら、君の分もあるから、おいでよ」

ジークは扉の側に立っている女の子に声をかける。女の子はこちらを睨んでいる。ジークは紅茶をさしながら「紅茶、紅茶」と言い続ける。女の子はまったくこちらに来る気配がない。さっきは野生のライオンに見えたが、今は懐かない野良猫のようだ。

ジークは紅茶のカップを持って、女の子に近付いていく。女の子の体が緊張したのが分かる。「はい」ジークは紅茶の入ったカップ

を差し出した。「飲みなよ。あつたまるから」女の子はジークから目をそらさず睨んだまま、カップを受け取ろうともしない。ジークは小さくうなづいて、女の子に差し出した紅茶を一口飲んだ。

「ほら、何にも入ってないから」

女の子の前に、飲んだ紅茶のカップをつきつける。つわものだと思った。俺には真似できない。女の子は目線をジークから外さずに、渋々といった様子でカップを受け取った。ジークは満足そうに笑って、俺の元へ戻ってくる。

「おいでよ。立ってると疲れるだろ」

ジークは女の子に手招きした。言葉が通じないというのは、もうこの際どうでもいいのだろうか。女の子はカップを持ちながら、ゆっくりこちらへやって来た。ジークの粘り勝ちだ。諦めなければ叶うこともあるのだと、何だか納得してしまった。

「そういえば椅子がなかった。レオンの膝の上、じゃ駄目だよな」

「馬鹿か」

ジークは小さな踏み台を持ってきて、自分の椅子を女の子にゆずった。俺は少し冷めたストレートティーを飲んで、深く息をついた。女の子が紅茶を舌で舐める。毒見しているのかもしれないが、猫のようだ。「さて」ジークは紅茶を俺の机の上に置いた。

ジークは自分を指差して、「ジーク」と言った。次に俺を指差して「レオン」。女の子を指差す。「君は？」女の子は紅茶のカップを両手で包んで膝の上へ置く。あまり乗り気ではなさそうだが、さつきより敵意は薄れている。

『アイネ・リルン』

「アイネ・リルン？」

復唱したジークに、女の子は頷く。言葉の壁は越えられるものなのかと、感心してしまった。口の中で女の子の名前を呟くと、先程のシマウマ体験がフラッシュバックした。

「そつえば、何かやられた」

「何が？」

ジークは首をかしげる。

「お前が紅茶取りに行く時に、アイネと一緒に出ていこうとして引き止めたら、何か魔法？　を撃たれたような気がした」

「何の呪文？」

「詠唱してなかったみたいだから、分からない」

ジークが重々しい顔をして口を開く。

「詠唱破棄って何か？」

俺は頷いた。詠唱破棄は呪文の名前だけで呪文を発動させる技術で、高度な魔法センスと高い魔力が必要だ。現代人で習得しているのは、世界で指折りの魔術師だけだ。

「外国の魔術師なのか？」

ジークは俺とアイネを見る。当然、答えはない。

アイネの目が俺の机に向く。アイネは机の上に広げっぱなしになっている教科書を見ている。

『ワプラ、ギジュオ、ラルベルク。呪文表？』

「ワプラ、ギジュオ、ラルベルク。読めるのか？」

ジークと一緒に教科書をのぞきこむ。古代語で、現代呪文から古代呪文までが書いてある。

「古代語は読める、と。まあ魔法が使えるんなら当たり前か」

俺はアイネを見た。俺の中に生まれた可能性について聞いてみる。

「ラルベルク、できる？」

『ラルベルク？』

アイネは首をかしげて、可愛らしい声で言う。「ラルベルク」俺は教科書の呪文表を指して、もう一度言う。アイネは迷うように目を伏せる。やはり違うのだろうか。アイネは膝の上に置いていた力ツプを、机の上に置いた。

『黒の空』

聞き慣れない古代語が耳に入ってくる。アイネは水をすくうように、両手を胸の前に出す。

『星 宙 塵 光 年月裂きて道筋露わに』

アイネの手の中が黒い光を帯びてくる。鼓動が速くなる。

『以って頭へ降り注げ』

アイネは手を頭上へ掲げる。まるで、夜空に星をまくように。

『ラルベルク』

部屋の天井いっぱい、黒い星空が広がる。息を飲んだ。ジークを見ると、同じように天井を見上げて、目を見開いている。

果たして、答えは出たのだろうか？ ラルベルク（天体呪文／星）は古代呪文だ。現代人で使える者は、誰もいない。

アイネが頭上で手を振ると、天井の夜空は消える。俺はジークと顔を見合わせる。

ノックの音がして、心臓が跳び上がった。「隠れて」ジークがアイネを洗面所に押しこむ。俺は扉を開けて、心の中で舌打ちした。今日は妙な客が多い。

白い正装の法衣を着た、白い長い髭の、白髪男性が立っていた。

「どうされましたか、大司教」

この周辺一帯の教区を管理する責任者が、目の前に立っている。普段は式典などにしか姿を現さないのに。大司教はしわの中の目を細める。

「人を探していてな。どうやら少女がこの敷地内に紛れ込んでしまったようだ。心当たりがあつたら教えてほしい」

確実にアイネのことだ。俺は答えていた。

「特には」

大司教は俺から視線を外す。

「誰かいたのかな。カップが三つあるようだ」

大司教は薄く笑う。カップまでは気が回らなかった。鋭いじいさ。さすが大司教という位についているだけのことはある。

「クラスメイトと勉強していて、先程帰りました」

大司教は長い顎鬚をしごく。

「そうか。それならちよっと中を調べさせてもらえないか。知らないうちに潜んでいるかもしれないから」

大司教が部屋の中に踏みこもうとする。ジークが扉の隙間を塞ぐように立つ。

「明日にしていただけませんか。ほら、雨も降ってますし」

意味が分からないが、気持ちには分かる。体で大司教の進入を阻んでいると、洗面所の扉が開く音がした。

振り返ると、ぶかぶかのパジャマ姿のアイネが立っていた。

「観念したか」

大司教が呟く。ジークは顔に手をあてる。

「さあ、来てもらおう」

大司教がアイネに近づく。アイネは大司教に手の平を向けた。冷たいエメラルドの瞳が大司教を見ている。大司教の足が止まる。大司教の手が、アイネに向けられる。

『透の空気 火 塵』

大司教が小さく呟いたのが聞こえた。アイネの指先が動く。

『アリス』

巻き起こった突風に顔を覆う。何かのはためく音や、落ちる音がある。「詠唱破棄か」大司教が苦々しく言ったのが聞こえる。

『ニーロ』

大司教の悲鳴が聞こえる。風がやんで目を開くと、白い服と肌を焦がした大司教が倒れていた。アイネは倒れた大司教の上に手をかざしている。エメラルドの瞳は、細い。

『黒の空 星 宙 塵 光 年月裂きて道筋露わに』

アイネの手のまわりに、黒いもやが現れる。黒い呪文など、現代には存在しないのだ。

『以て頭に降り注げ』

『駄目だ』

飛び出していた。見開かれたエメラルドの瞳が見えた。

アイネをかくまったのは、あそこで彼女を引き渡してしまったら、真実を知る機会が永遠に失われると思ったからだ。もっとも、アイネはおとなしく引き渡される気など、さらさらなかったようだけれ

ど。

俺は呪文の終わりを聞かず、体の千切れる痛みで、意識を落とす
た。

雨の音が聞こえた。目を開けると、天井のランプが眩しかった。寝ているんだから、消しておいてくれればいいのに。目を閉じるとまぶたの裏が暗くなった。目を開けると、アイネの顔が、あった。体が固まった。アイネは怒っているのか困っているのかよく分からない顔をして、俺の視界からいなくなった。足を動かしたら、何とも言えない激痛が走って、変な声を出してしまった。アイネが視界に入ってくる。やっぱり怒っているのか何なのかよく分からない表情をしている。アイネは俺の体の上に手をかざす。

『ノゼリオ』

白い温かい光が体に染みこむ。体がとても痛くて、回復呪文をかけられているということは、アイネの呪文に直撃したのだろう。死ななかったことにびっくりだ。聞きたいことはたくさんあるのだが、アイネに聞くととても大変そうだ。

「ジークは？」

アイネは横に目を向ける。

『寝てる』

俺は体ごと横に向く。ジークは椅子に座ったまま寝ていた。アイネを見ると、そういえばパジャマ姿ではなく、模様の入った法衣姿に戻っている。

「ここは、どこ？」

「ここ」と、下を指差して聞いてみた。もし通じたとしても、アイネから俺に伝えるのは無理なのではないかと、聞いてから気付いた。アイネは困った顔で、下を指差して首をかしげる。

『場所のこと？』

「ちがあかない。諦めよう。その代わり、思い出した質問をしよ

う。

「アイネ。トゥーシャ？」

アイネの顔から困った色が消える。目が伏せられる。アイネは、頷いた。俺の中で、ようやく点と点が繋がった。

その昔、創造主カタリナは世界を創り、植物を創り、動物を創り、人を創った。その人こそ、古代人のトゥーシャという種族だった。トゥーシャは現代人より魔力が高く、そこで魔法が生み出された。今も魔法が古代語なのは、トゥーシャが作ったからだ。

現代人は魔法が使える人の方が珍しい。職業も優遇されるので、大抵は神官か、魔術師か、軍人になる。けれど現代人はトゥーシャの作り出した魔法の半分も使えない。文献の解析が進んでいないというもあるが、大部分は魔力が低いということが原因のようだ。なので俺が古代呪文を口にしても、発動しない。アイネのように黒い呪文を使うことはできないのだ。

けれど、トゥーシャは数万年前に絶滅しているはずだった。

そこで、アイネがなぜ庭で倒れていたかを聞きたいのだが、このままではいつまでたっても聞き出せそうにない。

ジークの目が開いた。茶色の目と、目が合う。

「ああ、おはよう。レオン」

ジークは椅子から立ち上がって伸びをした。

「具合は？」

ジークは俺をのぞきこむ。

「体が痛い。でもさっきアイネが呪文をかけてくれた」

「お、仲良しだね。こっちはお前を運んだからもう筋肉痛だよ」

「大司教は？　　というかあの後どうなった？」

ジークは椅子をベッドの側まで持ってくる。アイネも側にある椅子に座る。

「大司教はお前がかばったおかげで大丈夫だった。一応、呪文をかけてきたから死にはしないと思うよ」

不安になってきた。大司教を殺してしまったとなれば、後々大変

なことになりそうだな。

「アイネの呪文が強すぎて、何回もかけないと駄目だったんだよ。それだけでくたかなのに、今度は重体のお前を抱えて逃げなきゃいけないときだ」

ジークはため息をつく。申し訳ないので、後で何かおごろうと思っただ。

「ということは当然、ここは寮の外だよな？」

「そうだな。寮の近くの本屋の二階だな」

「宿屋じゃなく？ しかも近くないか」

「宿屋じゃすぐばれそうだな。お前が重かったから遠くまで行くのは無理だったんだよ」

もったもなので、反論できない。

「本屋って、あの本屋？ いつも来てる？」

ジークは頷く。寮の側には、学生御用達の本屋があるのだ。

「まあそんな訳で、早めにここを出たい」

ジークは言う。確かに、本屋のおじいさんを巻きこむ訳にはいかない。

「どれくらい寝てた？」

俺は尋ねた。

「丸一日だな。まあ死ななかつただけでもたいしたもんだよ。明け方には出るぞ」

言い終わってから、ジークはこめかみを指で叩く。

「というか、これからどうするんだ？ アイネをかくまい続けるのか？」

アイネはジークを見る。名前に反応したのだろう。

「アイネはトゥーシャらしい」

ジークは眉をひそめる。

「生き残りってことか？」

「生き残りだったら大変だな。違うと思うけど」

「じゃあ古代から来たっていうのか？」

正直、そこがよく分からない。黙っていると、ジークはこめかみに手をあてる。琥珀色のピアスが目に入った。

「そんなことができるのか？」

独り言のようだ。

「トウーシャだっというのは疑わないんだな」

俺は言った。ジークは迷うように目を泳がせる。

「そう考えるしか、ないだろ？」

先程見た、天井の星空を思い出す。

「そうだな。とりあえず、翻訳機を買いに行きたい」

「翻訳機ね。分かった。もう動けるんだな？ まあ動けなくても明け方には出るけど」

体を起こそうとして、背中に激痛が走って、また変な声を上げてしまった。体がベッドに沈んだ。アイネが立ち上がって、俺の左胸に手をあてた。

『透の地 回 時 気 以って御身に降り積もれ ノゼリオ』

アイネの手がぼんやりと光る。左胸から、温かい流れが体に入ってくる。光が収まると、体のだるさがほとんどなくなっていた。体を起こす。ほぼ痛くない。俺はアイネを見た。アイネはやっぱり複雑な表情で、俺と目を合わせなかった。

腹の音が鳴った。俺ではない。ジークでもない。アイネの顔が赤く染まっていく。ジークは笑い出した。

「そうだな。呪文かけっぱなしだったもんな。感謝しろよレオン。何か食べ物買ってくるよ」

ジークは部屋から出て行った。

気まずい雰囲気の中で、改めて部屋の中を見回してみると、ベッドが一つしかなくなった。ジークはまあいいとして、アイネを床で寝かせてしまったのは申し訳ない。アイネはまだ顔をそむけている。頬は赤い。

「怒って、る？」

アイネがこちらを向く。怒っているかどうかをどう尋ねれば伝わ

るのか、分からなくて困った。

「ええと、床で寝かせて、ごめん」

俺は床を指差す。アイネが俺を見ている。駄目だ。絶対に伝わっていない。

『ラルベルク』

アイネが口を開く。さっきからずっと同じ、複雑な表情をしている。

『どうして受けたの？』

アイネはもう一度『ラルベルク』と言って、俺に手を向けて首をかしげる。もしかして俺を殺したいのだろうかと思ってしまう程、意味が分からない。

「怒ってる？」

俺は腰に手をあてて、頬をふくらますジェスチャーをした。駄目だ、二十二歳の男がやっていいことではなかった。すぐに恥ずかしさで死にそうになった。

「今のは忘れてくれ」

アイネは困惑した顔で眉をひそめる。俺がかけていた毛布を引つつ、丸めて床に置いた。椅子から立ち上がって、丸めた毛布に手の平を向ける。アイネは自分を指して、『ラルベルク』と言って、丸めた毛布を指差す。俺を指差して、毛布にかざした手の平の下に、俺を指した指を通す。

『どうして？』

アイネは首をかしげる。もしかして、丸めた毛布は大司教だろうか。訳すと、「どうしてかばったの？」か？ さて、俺はどうやって答えを伝えればいいのだろうか。

部屋の扉が開いた。「ただいま」ジークは抱えていた紙袋をベツドへ下ろした。この部屋には机がない。アイネは扉に向けていた手を下ろした。というか、いつの間に関手に向けたのだろうか。気が付かなかった。この警戒心の強さは異常だと思いが、アイネにとっては当たり前なのだろうか。

ジークは紙袋の中からアイネにサンドイッチを渡した。アイネは受け取ったが、受け取ったままジークを見ている。

「あ、毒見しないと駄目なんだっけ」

ジークはアイネの手ごとサンドイッチをつかんで、端をかじった。口を動かしながら、俺にサンドイッチを渡す。アイネはジークを見ている。倒れたりしないか確認しているのだろうか。俺はサンドイッチをかじる。

「アイネに、何で大司教をかばったんだって聞かれた」

「言葉通じたの？ やるじゃん。そんなの、好きだからに決まってるよな」

ジークの言っている意味がよく分からなかった。ジークは自分の分のサンドイッチをほおばっている。

「何が？」

「だから、好きな女の子に人殺しになってほしくなかったからだろって言ってるの」

否定の言葉を叫びかけて、やめた。本人の前で思い切り否定するのもどうかと思ったからだ。が、そういえば言葉が通じないので関係ないということに気付いた。アイネを見ると、サンドイッチの端をかじっていた。

「早いな。好きになるの。まあ好きになるのはいいことだよ」

「勝手に話を進めるな」

ジークは笑った。

「まんざらでもなさそうだな。とりあえず行き先は隣町でいいよな？ 翻訳機があるかは分からないけど」

俺は頷いた。アイネはサンドイッチを食べ終わっていた。エメラルドの目が紙袋を見ている。俺は紙袋を引き寄せて、中から出したサンドイッチをアイネに差し出した。アイネは受け取って、頬を赤くして、言った。

『ありがとう』

街は人で溢れていた。神学校のあつた街は割と静かなところだったので、隣町がこんなに栄えているとは知らなかった。

「まずは服かなあ」

ジークが言った。確かに神学校の白い法衣と、奇妙な模様が入ったアイネの白い法衣は街行く人々から注目を浴びている。というか、婦人達が珍しい物を見る目でこちらを見ている。このまま逃亡生活を続けるなら、目立たない服は必要だろう。とりあえず手近にあった服屋に入ることにした。

「何がいいかな。俺は魔術師って感じでもないしな。レオンは魔術師な」

「金はあるのか？」

「色々な手段を使って集めるだけ集めてきたから大丈夫」

色々な手段とやらについては聞かない方がいいだろう。アイネが側で立ち尽くしている。

「選んでいいよ。好きなの」

俺は大量にかかっている服を指しながら言った。通じたのか、アイネは店の奥へ歩いていった。

「ご試着もできますので、お気軽にお申しつけ下さいね」

綺麗な女性の店員がアイネに言った。言葉が分からないのだから、一人にしない方がいいのだろうか。ジークが服を持って俺の側を通りすぎていく。

「アイネ、これ着てよ」

ジークが笑顔で差し出したのは、布面積が少ない、うつすら透ける布がたくさんついた服だった。宝石もたくさん縫いつけられている。多分、酒場などが職場の踊り子の服だろう。

「そちらは新作でして、露出は高いんですが、この布を巻いていたくことによつて、ちよつと肌を出すのに抵抗があるなという方にも割と着ていただきやすくなっております」

肌を出すのに抵抗がある踊り子って、矛盾していないか？ アイネはジークに手の平を向けた。その目はとても、とっても冷たかつ

た。

「いや、ごめん。冗談です」

ジークは退散していった。アイネは手を下ろして、服を見始めた。店員がアイネに色々な説明をしているが、アイネは完全に無視している。分からないのだから当たり前だ。それでもまったく態度を変えず笑顔で説明を続けている店員は、プロだ。

アイネは服を持ってこちらに来る。俺の前で服を体にあてて、首をかしげる。

「着てもいい？」

訳すと「似合う？」だろうか。よく分からないので、店員に試着をお願いした。アイネは店員に連れられて試着室へ消えていく。アイネを観察していたので、自分の服をまったく選んでいない。逃亡中なのだから、あまり目立たない方がいいだろう。そうになると、やはり黒だろうか。何となく服を見てみると、アイネが戻ってきた。

クリーム色の立襟のブラウスに、よく分からない白い何かを重ねている。形はコルセットに似ているが、コルセットは下着だ。下は薄い布が何枚も重なった白いロングスカートだった。

「とってもお似合いです。このビスチェはジャガード織で薔薇の模様が入っていて、とても凝ったお作りなんですよ。スタイルもよく見えますし」

店員の熱心な説明を聞いて、ブラウスの上に重ねているのはビスチェというものと分かった。そういえばアイネの体型が完全に女の子に戻っている。布を外したのだろうか。最初からこの格好でいてくれれば、絶対に間違えなかったのに。

アイネは服を着たまま、硝子ケースの前に歩いていった。見ると、少しだけアクセサリが置いてある。アイネがケースの中身を指差す。店員がケースの中から金色の髪留めを出す。アイネのパターンをつかんだ接客に、心の中で拍手を送った。アイネは手早くおっぱいの髪の毛を後ろでまとめ、金色の髪留めで留めた。「お似合いです」店員を完全に無視して、アイネは帽子が置いてある場所へ行

く。浅い円柱型の白い帽子をかぶって、俺の方へ戻ってくる。

『これで』

よく分らないが、アイネはもう動く気配がないので、決まったということだろうか。ジークが服を持ってやってくる。

「お、可愛いじゃん。レオン選んであげたの？」

「いや、アイネが自分で」

「お似合いです。お客様」

「俺決まったけど、決まった？」

店員を華麗に無視し、ジークは言った。決まっていけないのは俺だけだ。

「黒にしようかと思って迷ってた」

「白にしろよ。アイネとお揃いで」

お揃いにする意味が分からない。

「あとお前髪の毛黒いから、黒だと全身真っ黒になるぞ」

全身真っ黒は思うところがあったので、おとなしく白にすることにした。これもジークの策略なのか。結局、ジークは黒、俺は白のシンプルな法衣にした。神学校の法衣と比べて、少し魔術師寄りになったのでいいだろう。三人並ぶと、魔術師の令嬢とそれを守る護衛のようだが、実際、一番強いのは令嬢だ。

俺達は盛大にお金を払って店を出た。店員が店の前で頭を下げて見送ってくれた。

「アイネは何で追われてるんだ？」

さつき服を何となく見ていた時に気付いた。ジークは空を見上げる。今日は雨上がりで雲一つない。

「トウーシャだから？」

やはりそうなのだろうか。少なくとも大司教はアイネがトウーシヤだと知っていたような気がする。詠唱破棄に驚かなかったからだ。

「翻訳機探すか」

俺は言って、アイネを見た。アイネは俺達の知らない答えを知っているはずだ。

まずは百貨店から調べてみることにした。剣、杖、鎧などが置いてある階のおじさんに、ジークが聞く。

「翻訳機はありますか？」「女性用？ 男性用？」「女性用」「受信発信両用？」ジークは頷く。おじさんはカウンターの奥に消えていく。翻訳機が性別で分かれているとは知らなかった。おじさんは赤い宝石のはまったイヤリングを二つ持って戻ってくる。ジークがアイネの方へ向いて耳を指す。「つけて」アイネはイヤリングを耳につける。鼓動が速くなる。

「言葉分かる？」

ジークは言う。アイネは眉をひそめて首をかしげる。

「何か喋ってみて」

ジークは口の前で手の平を突き出す。アイネは首をかしげる。

『何か、喋ればいいの？』

完全に翻訳できていない。体の力が抜けた。

「おじさん、これ不良品？」

ジークは不機嫌そうな顔でおじさんにつっかかる。

「そういう訳ではなくて、言葉が違いすぎるから訳せてないんだと思いますよ。訳したいならもっと強力なやつじゃないと」

「この店で一番強いやつは？」

ジークは言う。おじさんはアイネの耳元を指差す。「それですね」ジークは肩を落とす。

「百貨店にないってことは、専門店に行くしかないのか？」

独り言のようだ。翻訳機の専門店なんてあるのだろうか。

「翻訳機の専門店なんてあるんですか」

俺は聞いてみた。

「少なくともこの街にはありません」

おじさんは淡々と言った。「他の街にはあるかもしれませんが」今のはおじさんなりのフォローなのだろうか。

「まあ翻訳機は宝石の質がすべてなので、市販のもので訳せないな

ら、宝石店で加工してもらうしかないでしょうね」

「行くか、宝石店」

ジークが言った。アイネはおじさんにイヤリングを返した。

硝子ケースの中に眩しく輝く宝石がたくさん並んでいる。カウンターに女性が座っていた。長い黒髪がゆるくカールしている。

「何かお探しかしら」

女性は微笑む。宝石店の店員というよりは、酒場で歌っていそうだ。二十代後半くらいだろうか。

「翻訳機に一番向いてるやつはどれですか？」

ジークは言う。

「翻訳機？ ああ、魔力が強い石のこと？ ちょっとお待ちなさいな」

女性はカウンターの奥に消えていく。硝子ケースの中の宝石には値段がついていない。時価なのだろうか。女性が戻ってくる。黒い別珍のトレイの上に、赤い宝石が乗っている。

「これが今店にある中で一番魔力が強い宝石よ。触ってみる？」

女性は白い手袋をした手で、手袋を差し出す。

「これで訳せるかどうか、加工してみないと分からないですよね？」

ジークは言った。女性はあごに手をあてる。

「そうね。でもこの石は世界で一番魔力の強い石だから、これで訳せなかったらもう無理ね。これは割とランクの高いものだし」

「でも最高ランクではないんですよ？」

「そうよ。最高ランクにまでなったら、国が一つ買えるわ」

ジークは俺の方を見る。俺は口を開く。

「ちなみに、これはおいくらですか」

女性は微笑みながら、俺とジークの一生分の稼ぎを足したらようやく足りるかもしれない金額を言った。俺はジークを見た。目と目で通じ合ってしまった。絶対に買えない。

「お金が足りないのかしら？」

「そうですね。絶望的に」

ジークが言った。

「この子が外国人なの？」

女性はアイネを見る。

「そんなに強い石でないと、駄目なの？」

「百貨店で一番強いやつでも駄目だったんで、なるべく強い方がいいと思って」

「市販のもので通じないなんて、一体どこの子なの？」

教えるべきではない。ジークもそう思ったのだろう。口を開かない。

「トウーシャ？」

女性は言った。俺は女性の目を見てしまった。女性は目を丸くする。

「あら、当たったの？ 本当に？」

しまった。自分の反応の素直さを呪った。

「そうよね。今時訳せないなんて、誰も知らないような国が、トウーシャくらいだものね」

女性は微笑んでいる。

「本当にトウーシャなの？ 昔の呪文が使えるの？ 見たいわ」

今ならまだ知らばつくれることができる。横目でジークを見る。

ジークは、息を吐いた。

「いいよ、もう自棄だ。アイネ、古代呪文見せて」「ジーク」

アイネはジークを見たが、多分通じていない。ジークは取り消すつもりはないらしい。俺も自棄に付き合うしかなさそうだ。

「じゃあ、シユアレクが見たい」

俺は自分が見たい呪文を言った。「アイネ、シユアレクやって」

アイネは女性を見てから、腹の前で手を組んで、目を閉じた。

『緑の地 自 土 風 水 気 露の香り浴びて甘く』

アイネの手が緑色に光る。アイネは目を開く。瞳の色と、同じ色

だ。

『以つてこの地に舞い踊れ』

アイネは手を解いて、すくっていた水をこぼすように手を離れた。
『シユアレク』

床に光が広がる。草が生えていく。壁にはつるが這い、花が咲く。
店の中が緑に埋めつくされる。

アイネは床に向けて手を振った。緑が消えて、女性の拍手の音で
我に返った。

「すごいわ」

確かにすごい。現代人が使える呪文とは格が違う。

「まさか本当にトウーシャの呪文が見られるなんて思わなかった。
ありがとう」

女性の頬は紅潮していた。

「あなた達、この石が必要なのよね？」

女性はトレイの上の赤い宝石を指差した。俺とジークの一生分の
給料と同じ価値がある、あれだ。俺達は領く。

「お礼といつては何だけれど、これを、あげるわ」

「本当ですか」

ジークがカウンターへ身を乗り出す。

「ただし、質問に答えられたら」

女性は唇に指をあてて、トレイをジークから離す。

「この世界でみんなが幸せに生きていくために必要なのは何かしら」

「お金」

ジークは即答した。

「お金で幸せは買えるけれど、そういう意味の質問じゃないの」
俺は形式的な言葉を口にする。

「愛？」

神学校で誰でも教わるフレーズだ。『すべての人を愛しなさい』。
女性は笑う。

「そうね。みんながみんなを愛せば、幸せになれるわ。世界を変え

るのは愛よ」

ジークは納得がいかそうな顔をしている。

「いつかきつと分かる時が来るわ」

女性はトレイを持って店の奥へ歩いていく。

「正解なんですか？」

俺は尋ねた。女性は微笑んだ。

「加工してくるから、少々お待ちなさいな」

そう言つて奥へ消えていった。俺はアイネを見た。エメラルドの瞳がこちらを見る。

アイネが言葉を分かっていたら、絶滅してしまったトゥーシャは、今の質問に果たして何と答えたのだろうか。

女性がトレイを持って戻ってきた。トレイの上には赤い宝石がはまつた、羽の形に似た金色の飾りが置かれていた。

「つけてみて。左耳にね」

女性が手袋をした手で飾りをアイネに渡す。アイネは飾りを受け取る。アイネの左耳の上に、飾りが収まる。

「言葉、分かる？」

俺は尋ねた。アイネが俺を見る。アイネは眉を寄せて、左耳を押さえる。「何か喋つてみて」ジークがジェスチャーする。

『雑音が酷い』

アイネの声に聞き取れないくらいのノイズがかかっている。女性は頬に手をあてる。

「それで駄目なら、もう駄目ね」

やはり駄目なのだろうか。現代の技術では、古代人と会話することもできないのか？

アイネは左耳から飾りを外す。白い細い指で、赤い宝石を撫でる。アイネの指先が、水面に石を落とした時のように光る。アイネは飾りを左耳につける。

「これで、聞こえる？」

俺はアイネの目を見る。アイネは眉をひそめる。

「まだ駄目？」

俺は思い切り首を横に振る。女性はため息をついた。多分、感嘆のだ。

「何をしたの？」

女性がアイネに尋ねる。「石に魔力を、ちよつと」アイネの答えは歯切れが悪い。トゥーシャの秘密なのだろうか。

「本当にトゥーシャなのね」

女性は真剣な顔をしていた。

「俺の言葉も分かるの？」

ジークがアイネの側に寄ってくる。アイネは頷く。

「名前、通じてた？」

「さすがにそれくらいは」

ジークは自分を指差す。「ジーク」アイネは言う。ジークは俺を指差す。「レオン」エメラルドの瞳が俺を見上げている。

「ほら、レオンも何か言えよ」

いきなり言えと言われても、困る。

「まあいいや。無事通じたことだし、帰ろう。立ち話もなんだし」ジークは意外にもあつさり引き下がった。俺は、すごく気になっていることを女性に尋ねる。

「あの、お金は」

「あげるわ」

女性は微笑んだ。

「後から取り返しに來たりしませんか」

ジークが尋ねる。なにしろ二人の給料一生分だ。それなのにただなんて、ただより高い物はない。

「取り返したつて、そんな強い翻訳機誰も使わないもの」

そういう問題ではない。俺はジークを見る。ジークも俺を見ていた。

「いいの。それはトゥーシャに会えて呪文を見せてもらったお礼。

本物のトゥーシャにはそれ以上の価値があるわ」

「じゃあ、もう返してって言っても返しませんからね」

ジークが言う。女性は笑い声を抑えて「どうぞ」と言った。三人で女性に頭を下げた。女性は、笑顔で手を振って見送ってくれた。

「また会いにきてね」

女性がそう言ったように聞こえたが、遠くて返事はできなかった。

紅茶を飲んだジークを、アイネは紅茶のカップを握りしめながら見ている。ジークは気付いて、アイネを見る。

「あ、毒見しないと駄目だっけ」

「もういい。この後何も起こらなければ大丈夫だから」

俺はミルクティーを飲んだ。かき慣れた香りは、落ち着く。今度は机に加えて、サイドテーブルもある宿屋なので、三人で円くなつてちゃんとお茶を飲める。

「トゥーシャはみんなそうなの？」

俺は言った。

「いつもはこんなことしないけど、知らないところだから」

「じゃあ、改めて色々聞いてもいいかな」

ジークは言う。俺もジークも、紅茶のカップをサイドテーブルに置く。アイネも、一口も飲んでいない紅茶をサイドテーブルに戻す。

「ここに来る前、どこにいたの？」

「それは私が聞きたい。ここはどこなの？」

「それは後で答えるよ。アイネのことが先だ」

アイネは口を閉じる。不満そうだったが、口を開いた。

「村にいた」

「トゥーシャはたくさんいたの？」

アイネは頷く。「というか、トゥーシャしかいないのか」ジークは独り言のように訂正する。

「で、何があつてここに？」

「石碑の前にいて、突然光に包まれて、気付いたらここに」

「石碑って何の？」

俺は尋ねた。アイネは目を伏せる。

「カタリナ様の」

「カタリナって、創造主の？」

アイネは頷く。

「何してたの？」

「別に何も。そこからの眺めが好きだから」

「アイネのいた場所は、何年だった？」

「一〇十四年」

少しだけ嫌な予感がした。一〇十四年はトゥーシャが絶滅した年だ。

「今は、何年？」

アイネが尋ねる。俺は口を開く。

「六二〇〇九年」

アイネは目を丸くして、それから伏せた。アイネの中でも、何か繋がったようだった。

その昔、創造主カタリナは世界を創った。カタリナに創られたトゥーシャは、カタリナと共に暮らしていた。それが一年のことだ。五八七年、カタリナの統治に不満があつたトゥーシャ達はカタリナに全面戦争をしかけたが、カタリナが圧勝し、トゥーシャは絶滅の危機に追いこまれた。

五九七年、生き残ったトゥーシャ達は一斉蜂起し、とうとうカタリナから実体を奪った。さすがのトゥーシャも創造主を殺す力はなく、実体を奪うのが精一杯だったというのが現代の見解だ。実体を奪われたカタリナは、誰かの肉体を寄り代にしなければ世界へ干渉することができなくなった。

そして一〇十四年、一人のトゥーシャがカタリナを召喚し、カタリナによってトゥーシャは絶滅させられた。寄り代の肉体が死亡した後、六万年間カタリナは召喚されていない。

「アイネは一〇十四年から来たってことでいいのか？」

ジークが言った。

「そうなるんじゃないか」

ジークは眉を寄せて、腕を組む。

「どうやって？」

俺はアイネを見た。

「カタリナを、呼んだの？」

アイネは俺を睨んだ。

「呼んでない。どうしてそんなことしなくちゃいけないの」

意外だった。アイネがカタリナを召喚したと思っていたからだ。

確かに考えてみれば、アイネがカタリナを召喚したとしても、六万年後に飛ばされる理由が分からない。

アイネは机の上のカップを取って、紅茶を飲んだ。カップを戻す。

「そろそろ聞いてもいい？」

アイネは言った。手詰まりになってしまったので、俺は頷いた。

ジークも頷く。

「ここは未来でいいのね？」

「多分」

俺は言った。「多分って、何？」アイネが眉をひそめる。

「本当にアイネが昔から来たのか、まだ信じられない」

「私だってここが未来かなんて信じられない。とりあえず一〇十四年からの出来事を教えて。全部」

俺は一〇十四年にトゥーシャが絶滅したこと、その数万年後に今の人種が誕生し、カタリナは一〇十四年以降、一度も召喚されていないことを話した。トゥーシャが絶滅したと言っても、アイネは表情を変えなかった。

「だから聞いたのね」

「何を？」

「カタリナ様を呼んだかどうか。でも呼んでいたとしても、ここへ来た理由が分からない」

それは先程、思った。「でも呼んでないからね」アイネは念を押した。

「じゃあこの時代から誰かがアイネを呼び寄せた、とか」

「誰が？」

ジークが言った。まったくもつともな質問だ。

「それは分からない」

「そりゃそうだ」

静かになった。ジークのうなり声だけ聞こえる。

「分かった。視点を換えよう」

ジークはアイネに向き直る。

「歳いくつ？」

アイネいぶかしそうな目でジークを見る。

「十九だけど」

「趣味は？」

「それ、お前が聞きたいだけじゃないのか」

思わず遮ってしまった。

「どこから何が発展するか分からないだろ。レオンも聞きたいこと聞けよ」

それなら、なぜ胸を潰していたのかずっと気になっているのだが、そんなことは聞けない。聞いたら多分、殺される。

「カタリナはどうやって召喚するの？」

俺はアイネに尋ねた。

「呪文がある。でも、絶対に口に出しては駄目」

「それは現代人でも使えるの？」

アイネは首をかしげる。「どういうこと？」ジークが思い出したように手を打つ。

「現代人はトウーシャより魔力が低いんだよ。レオン、説明してないだろ」

そう言われてみればそうかもしれない。

「現代人は魔法が使える人の方が少ないよ。使えても、発動文が一

「つのものしか使えない」

ジークが言う。

「本当に使えないの？」

「少なくとも俺とレオンは現代呪文しか使えない。現代呪文って、発動文が一つしかないやつね」

アイネは頷いた。

「そういえば大司教に追われる心当たりは？」

俺は言った。アイネは首をかしげる。

「大司教って誰？」

「あのおじいさん」「ああ」アイネは頷く。

「あの人は何だったの？」

「よく分からないけど、アイネを連れて行きたいみたいだった」

「どこに？」

「それは知らない」

「ああ、そっか。大司教に聞いてみればよかったな」

ジークが言った。

「そう簡単に教えてくれないと思うけど」

「でも大司教ってことは、大分上層部が絡んでるってことだろ」

確かに大司教の独断か、大司教より上からの要請があったか、だろ。

「大司教か、大司教より上の誰かがアイネを過去から連れてこようとしたけど、失敗してあそこにアイネを飛ばしてしまった、とか」

俺は言った。でも、なぜアイネを現代に呼び寄せたのかは説明がつかない。

「それにしても、現代の技術で過去から人を転送できるようになったってことだよな？」

仮定を真実とするなら、そうなる。俺は頷いた。「進歩したな」

ジークは呟いた。

「アイネ、心当たりないの？」

俺は言った。

「何の？」

「現代に飛ばされてきた理由」

アイネは俺を睨んだ。

「ない」

どうやら思った以上にアイネは被害者だったようだ。俺は息を吐いて、サイドテーブルの上のすっきり冷めた紅茶を飲んだ。

「じゃあ、これからアイネを過去に送り返す方法を探すか」「レオン」

ジークが俺の言葉を遮る。

「戻ったらトウーシャはすぐ絶滅するんだぞ。いいのか？」

ジークは俺とアイネを交互に見る。

「それが歴史なら」

アイネは目を伏せて、抑揚のない声で言った。

「分かってるんだろ？」

俺は言った。ジークは目を伏せる。

「分かってるけど、さ」

俺だって、何も感じていない訳では、ない。誰も喋らない。俺は覚悟を決めた。

「アイネ、一つ聞いていい？」

アイネがこちらを見る。

「何で胸潰してたの？」

変な間があった。アイネの頬が赤く染まっていく。手の平が向けられる。

「変態」

呪文代わりの怒声の後、俺はものすごい水流に飲み込まれた。

アイネは胸がないという訳ではなくて、むしろ大きい。死を覚悟してまで聞いたのは、場の空気を一掃するための俺なりの配慮だ。

断じて聞きたかったからではない。

気付くと部屋の端に椅子ごと流されていた。一瞬、意識が飛んだらしい。水は跡形もなく、服も濡れていない。さすがに手加減して

くれたようで、ちゃんと生きている。ジークがこちらにやってくる。
「胸潰してたって何？ 初耳なんだけど」

アイネがこちらに手を向ける。

「ジーク、後ろ後ろ」

ジークは振り返って、一瞬固まって、椅子の方に戻っていく。

「レオンの変態。よく分かんないけど」

ジークが口の横に手を当てて言う。

「違う。雰囲気を変えようと思ったの」

「もう少しましな質問はないの？」

アイネがこちらを見ている。その目は、服屋でジークに手を向けた時と同じで、とても、とっても冷たかった。「ごめんなさい」俺は小さな声で謝った。

「まあその勇気は賞賛するよ。よく分かんないけど」

アイネが横目でジークを見る。ジークは震え上がる。

「じゃあ無事雰囲気が変わったところで、明日からどうしようか」
ジークは言った。全然無事ではないのだが、俺は椅子を持ってサイドテーブルの側まで戻る。椅子が壊れなくてよかった。壊したら弁償だ。

「両親に会いに行きたい」

俺は椅子に座り直して言った。

「何？ 里帰り？ ああ、アイネを両親に紹介するのか」

「違う」

俺が叫ぶのと、アイネがジークに手を向けるのは同時だった。

「いや、冗談です」

アイネは手を下ろす。ジークをすごく睨んでいる。

「色々顔が広い人達だから、何か知ってるかもしれない」

「じゃあ行こう。今のところ手がかりはないし」

アイネと目が合った。

「下心はないから。本当に」

若干嘘だが、これ以上心身共に傷を増やしたくないので言わない。

「そのフローいらない」
墓穴を掘ってしまった。アイネの視線がとても、とっても痛かった。

「レオン、アイネ起こしてきて」

着替え終わって、鳥のさえずりを聞きながら日光浴をしているところに、ジークが言った。アイネは隣の一人部屋だが、まだ姿を見ていない。

「嫌だ。殺されそうだ」

勝手に部屋に入ったら、それこそ何が起きるか分からない。

「殺されはしないよ。負傷したら治してもらえるよ」

「嫌だ。ジーク行けよ」

「俺は負傷したくない」

話し合いでは一生決着がつかないので、じゃんけんで決めることにした。

「じゃんけん」

これで今後の運命が決まると言っても過言ではない。

「ぽん」

ジークはチョキ、俺はパーだった。目の前が暗くなる。体の力が抜けていく。

「行ってこいレオン。骨は拾ってやるよ」

ジークが俺の肩を叩いて、鍵を渡す。というか、普通女の子の部屋だったらみんな行きたがるはずなのに、この違いは何なのだろうか。生死がかかっているか、いないかか？

俺は腹を決めてアイネがいる部屋の扉をノックした。返事はない。思いきりノックした。返事はない。そもそもノック程度で起きるくらいなら、既に起きてこちらの部屋まで来ているはずだという結論に達した。それでも諦めずノックしたら、隣の部屋からジークが顔を出した。

「レオン、うるさい」

「畜生、安全圏にいるからって勝手なこと言いやがって」

「いや、うるさいのは本当だから」

俺は鍵を使って地獄の扉を開けた。部屋の中はカーテンが引かれていて薄暗かった。恐る恐るベッドに近付くと、アイネの横顔が見えた。完全に寝ている。俺は扉の隣の壁際まで戻った。

「アイネ、朝だよ」

反応がない。名前を呼んでみたが、まったく動かない。揺り起こさないと駄目なのか？ それだけは避けたい。けれど呼び続けても反応がない。生きているのか少し不安になってきた。

手を伸ばして、なるべく遠くからアイネの肩を叩いた。アイネの後ろ頭が動く。アイネはあっさりと、こちらを振り返った。薄く開いたエメラルドの瞳が俺を見ている。

「お、はよう」

アイネは上体を起こした。俺は身構えた。けれど、手を向けられる気配がない。

「飛ばさない、の？」

てつきり昨日のように飛ばされると思っていたので、意外だった。アイネは俺などいないかのようにベッドに腰かけて、左耳に翻訳機をつけた。長いスカートを柔らかく揺らして、カーテンを開けた。光が満ちる。目を細めると、アイネの白いネグリジェの輪郭が光に溶けた。アイネが俺の前に来る。

「布を巻いてたのは、父が男の子が欲しかったからっていうのと、動く時に邪魔だから」

何のことか分からなかった。昨日の質問の答えだと、数秒たって気付いた。

「あ、いや、ごめん、本当に」

まさか本当に答えてくれるとは思っていなかった。しかも真面目に。逆にこっちが恥ずかしい。アイネは真っ直ぐ俺を見ている。

「レオンとジークに助けられてよかった」

アイネは下を向いて、顔を上げる。

「ありがとう」

俺は、アイネの穏やかな表情を、初めて見た。

無傷だった俺を見て、ジークは質問を浴びせかけたが、時間だからと馬車に乗りこませた。紳士淑女が乗る馬車ではないので、車輪がともうるさい。

「何で無傷なの？」

「アイネが怒らなかったから」

「何で？」

「それは俺が聞きたい」

アイネは端の席で窓枠に頬杖をついている。どうやら聞こえていないようだ。ジークが真ん中、俺とアイネが端の三人横並びだ。

「ちゅーしたの？」

反射的にジークの頭をはたいていた。

「何でそうなるんだ」

叫んでしまった。アイネを見たが、聞こえていないようだ。よかった。

「つまんないの。せつかくだから何かしてくればよかったのに」

「そういう問題じゃないだろ」

「好きなんだろ」

いくら聞こえていないとはいえ、本人の前でそういう話をするのはどうなのか。

馬車が揺れた。アイネがジークの肩に倒れてきた。帽子が落ちる。

アイネは動かない。

「寝てる」

ジークが言った。よくこんな酷い環境の中で寝れるものだ、嫌味ではなく素直に感心した。

「疲れてるのかな」

俺は帽子を拾った。

「レオン、こっちの席にすればよかったな」

「そういうのはもういいから」

窓の外を見ると、景色は完全に田舎になっていた。緑、緑、緑、川、田園、また緑。今日もいい天気だ。窓には硝子をはまっていた。風通しが最高にいいので、冬は乗れないだろう。暖められた草の香りをかぐと、懐かしい気持ちになる。同じような形をした白い家は何軒も見えてくる。馬車が止まると、車内も盛大に揺れる。

「アイネ、着いたよ」

ジークは言ったが、アイネは起きない。

「叩かないと駄目かも」

ジークがアイネの肩を叩くと、アイネはあっさりと目を開けた。声では起きないらしい。俺はアイネに帽子を渡した。アイネは寝起きには見えない動きで、帽子をかぶって馬車を降りた。

「レオン、家どこ？」

ジークが言う。思い出に浸らせてもらえない。

白い家の連なりの向かいに、道をはさんで黄色い花畑がある。花の上を白い蝶が何羽も飛んでいる。変わっていない。

白い家のうち一軒の扉をノックする。何も連絡しないで来たので、もしかしたらいないかもしれない。と思ったら扉が勢いよく開いた。黒髪の、髪の毛がくるくるにカールした、小柄な女性がいた。女性性は目を丸くして、俺を見た。

「レオンちゃん？ お帰りなさい」

笑顔が咲くとは、きつとこういう表情なのだろうと、俺は女性を見て思った。

「ただいま」「レオンちゃん」ジークが後ろから小声で呟く。「そこは流せ」

「色々あって友達を連れてきたから、上がってもいいかな」

「ジーク・フォンフィリアです」

ジークは女性の前に出てきて握手した。アイネも前に出てくる。女性の目が、明らかに輝いている。まずい。

「アイネ・リルンです」

アイネはぎこちなく女性と握手する。

「レオンちゃんのお嫁さんなの？」

「違います」「違う」

俺もちゃんと否定したが、アイネのまったく感情のこもっていない声に、少し傷付いた。

「母さんもちちゃんと挨拶して」

女性、もとい母は元氣よく返事をする。

「申し遅れました。シンシア・マグダラスです」

ジークが俺を見て小声で言う。

「若くない？」「前髪があるからじゃないのか」

ジークの質問を適当に流し、家へ上がる。

「父さんは？」

「畑に行ってるけど、すぐ戻ってくるわよ」

母は台所でお茶の準備を始めている。

「やるよ。座ってていいよ」

「レオンちゃんお客様なのに。でも久しぶりにレオンちゃんの紅茶が飲みたいから、お願いしちゃうかな」

居間では、母に、ジークとアイネが向かい合って座るという変な場ができあがった。

「二人共、レオンちゃんのお友達なの？」

「俺は学校の寮の同室で、友達です」

母はアイネを見る。目が輝いている。

「私は、知り合い？ です」

今、『知り合い』の部分が疑問形だったぞ。確かに友達ではないが。

「学校は男の子しかいないわよね？ どうやって知り合ったの？」

母が台所の俺に聞いてくる。

「父さんが来てから話すよ。聞きたいこともあるし」

「先に話してくれたっていいじゃない」

母は頬を膨らませる。

「二回話すと面倒臭いだろ」

「何でも面倒臭がつてると、すぐにおじいさんになっちゃっわよ」

「はいはい」

「はいは一回でいいの」

俺は笑ってしまった。

「何で笑うのよう」

「何でもないよ」

「レオンちゃんはすぐそうやって秘密にするんだから」

紅茶のポットと、カップとソーサーを人数分プラス一、ミルクポットと砂糖瓶をトレイに乗せて、居間に持っていく。玄関で声がした。母が立ち上がる。

「お帰りなさい」

居間に、黒髪で丸い眼鏡をかけた男性が入ってくる。俺を見ると、男性は微笑んだ。

「お帰り、レオン」「ただいま」

男性が俺の側に来る。

「大きくなったね。背が」

確かに身長は伸びたと思うが、どう反応すればいいのか、困る。

「レオンちゃんが困ってますよ」

父は笑った。

「ごめんごめん。こちらは友達かな」

俺は頷く。ジークは立ち上がって、自己紹介をして父と握手する。

アイネもぎこちなく名前を言って、握手する。

「レオンのお嫁さんかな？」

「違います」「違う」

アイネの言葉が胸に刺さる。嘘でもいいから、少しくらいむきになつてくれたりしてもいいのに。

「トニー・マグダラスです」

父は母の隣に座った。俺はジークの隣に座って、全員分の紅茶を

注いだ。

「突然どうしたの？ ホームシック？」

「ホームシックではない。ちょっと聞きたいことがあって」

俺は順を追って、アイネをかくまったこと、アイネがトゥーシャだということ、追われていること、アイネを過去に送り返したいということを話した。

「古代呪文、見たい見たい」

案の定、母は目を輝かせて言った。

「アイネは見世物じゃないんだぞ」

「でもレオンちゃんはもうたくさん見てるんでしょ。ずるい」

「ずるいとかそういう問題じゃない」

「呪文くらいだったら」

アイネは言った。「本当に？」母はアイネを見つめる。アイネは頷く。

「やったあ。ほら、レオンちゃん、諦めなければ夢は叶うのよ」

意味が分からない。

「何がいいですか？」

アイネが尋ねる。

「私、呪文の名前分らないの。でも、一番綺麗なやつが見たいわ」
アイネは水をすくうように、胸の前で手を合わせる。ラルベルク
(天体呪文／星) だろうか。

『白の空 月 宙 塵 光』

アイネの手元が黒に包まれる。

『陽の面影纏いて淡く 以って頭に降り注げ』

アイネは両手を上へ離す。黒が、溢れる。

『レリーナ』

居間は黒に包まれて暗闇になる。天井に、白い満月が浮かび上がった。本物のように、模様と、淡い光に包まれている。アイネが天井へ手を振ると、暗闇と月は消えた。母は、机の上のアイネの両手を握って、振った。

「ありがとう。すごい、すごいよね」

頬を紅潮させて話す母は、少女のようだ。アイネは母に手を振られたまま、目を伏せて頬を赤くしている。褒められるのに慣れていないのだろうか。父が母の手をアイネからはがす。

「それで、何を聞きたいの？」

父は言った。

「アイネを過去に送り返す方法」

「それは、ちょっと私達でも難しいよ」

「何でもいいんだ。最近の軍の動きとか。知ってることを教えてくれ」

「レオンは軍がアイネさんを転送してきたと考えてるの？」

「初耳だな」

ジークが言う。思い出したのだ。

「何のために？」

父が、俺に問う。

「軍事兵器として戦争に投入するために」

父は頬杖をついて、机に視線を落とした。

「可能性としてはあるかもしれないね。でも残念ながらそういう場所の情報は持っていないよ」

「ハインは？」

「ハインちゃんは、帰ってきてないわ」

「ハインさんって、どちら様？」

ジークが言う。

「兄で、軍人」

俺は言った。父も母も口を開かない。限界か。

「ハインを探すよ」

「役に立てなくてごめんね」

「でも、開戦するのは私達から見ても確実よ」

父の言葉に母が重なる。

「お二人は何のお仕事を？」

ジークが言う。そういえば何の説明もせずに話を進めてしまった。
「国際ボランティア団体で働いてるよ」

「面倒だからついでに全部話すよ」

母が心配そうな顔で、俺を見ている。

「二人は里親で、休戦した時に仕事を通じて俺達を引き取ってくれた」

丁度、十年前だ。玄関でのジークの疑問は、これで解決しただろう。

「ハインはもう大人だったから、軍に入隊した。俺は学校に行かせてもらって、神官になることにした」

話してみると、意外と短かった。こんなものなのかもしれない。

誰も何も言わなかった。

「今日は泊まっていくのよね？」

母が言った。「二人がよければ」俺はジークとアイネを見た。二人は頷いた。

「じゃあご馳走を作るわね」

母が立ち上がる。

「早くない？」

「レオンちゃんはそうやってのんびりしてるから、お嫁さんが見つからないのよう」

「それは言いすぎだと思うよ」

母の言葉に俺は深く傷付いた。母は台所に走っていった。

「お父さんの作った野菜、とっても美味しいんだから」

早速エプロンをしている。まだ昼なのに。

「ハインの居場所の当てはあるの？」

父が言う。

「本部にいるんじゃないのか？」

「開戦間近だから、別のところにいるかもしれないよ」

「本当に行くのか？ アイネを渡しに行くようなもんじゃないか」
ジークが言う。

「他に突破口が浮かばないんだ」

「そもそも軍がアイネを呼んだのかどうかも分からないだろ」

「だから本部に行く時は、俺一人で行くよ」

ジークは口をつぐむ。人を過去に送り返す方法なんて、誰も分らないのだ。

「ありがとう」

小さな声でアイネが言った。言葉が続けるのかと思ったが、アイネは黙っている。

「何が？」

俺は聞いた。

「二人に言いたかっただけ」

ジークが大きく息を吐く。

「分かったよ。最後まで付き合う」

「別に無理して付き合ってくれなくてもいいぞ」

「レオンとアイネがくつくくまで見守るよ」

アイネはジークを見る。睨んでいる。ジークは知らばっくれているのか、あらぬ方向へ目をそらしている。

「三角関係ではないんだ」

父が言った。

「俺はもう心に決めた人がいるんです」

ジークが親指を立てて言う。初耳だ。

「ジーク、お前、いつの間に」

「という訳で、レオン頑張れ」「頑張つて」

ジークと父が言った。母が台所から大きな皿を持ってくる。

「はい、畑の野菜のバター炒めですよ」

居間の机に野菜炒めの皿が置かれる。

「母さん、早い。まだ昼だぞ」

「いいじゃない、お昼ご飯にすれば。他はもう少し時間のかかる物を作るから、そのうち夜になってるわ」

居間に座った人達は、強制的に野菜炒めを食べさせられた。でも、

美味かった。玉ねぎ、キャベツ、にんじんの甘みを塩が引き立て、
バターの香りがそれをまとめる。

「美味い」

「でしょう？」

野菜を炒めて味付けしただけで、ここまで美味しいとは思わなかった。野菜炒めを甘く見ていた。

「もっと美味しいもの作るから、待っててね」

母は笑顔で台所に走っていった。

夕食は食べきれないくらいの肉と魚、スープにサラダに米が出た。父はワインをあけてくれた。アイネは気分が悪くなったらしく先に部屋に戻った。ワインが苦手だったのかもしれない。俺も居間を抜けた。今は父とジークが二人で語り合っている。

廊下は暗く、空気は冷たかった。昔使っていた部屋の扉を開ける。ここへ来てから食べっぱなし飲みっぱなしで忘れていたが、墓参りに、行かないと。

窓の外の黒い夜空に、円い月が浮かんでいる。ベッドにアイネの後ろ姿が座っている。後ろ姿が振り返る。暗がりで見え、合う。

「間違えた。ごめん」

正確には間違っていないのだが、母は俺の部屋をアイネにあてがうことにしたようだ。紛らわしい。

『待つて』

出ていこうとして、アイネを振り返る。左耳には翻訳機がついていない。アイネは目を伏せた。

『何でもない』

言葉が分からない。けれど、この状態でアイネを放っておけるやつなどいるのだろうか。別に酔っているからとか、下心があるからという訳ではなく、アイネの目が赤いように見えたのだ。

俺は部屋に入った。扉は閉めなかった。椅子を引いてきて、ベッドの側に座った。

「ホームシック？」

アイネはこちらを見ない。そういえば通じないのだった。立ち上がって、窓を開けた。風が心地よい。

「アイネのところに、月は同じなの？」

俺は月を指差して言った。アイネが月を見上げると、下ろしたおかつぱの銀色の髪が揺れる。アイネはうつむいて目を伏せた。何も言わない。引き止められたように感じたのだが、自意識過剰だっただろうか。

「何かよく分からないから、戻るよ」

扉まで歩いていくと、アイネの声が聞こえて体を引っぱられた。振り返ると、アイネが服の背中をつかんでいた。どうすればいいのだ。

「アイネ、翻訳機」

俺は自分の左耳を叩いてみせた。アイネは下を向いている。もうどうにでもなれと思って、俺はアイネを思い切り抱きしめた。

アイネの体は温かくて、柔らかかった。神学校の庭で抱き上げた時、どうして気付かなかったのだろう。

耳元で、アイネがしゃくりあげるのが聞こえた。我に返ってアイネを離す。

「ごめん」

泣く程嫌がられるとは、ショックだ。けれどアイネは首を横に振って、俺の服をつかんで肩に額をつけた。俺はアイネの肩に手を置きかけたが、背中を叩いて、さすってやった。

目の前で泣いているアイネは、トウーシャでもなく、感情を殺した女性でもなく、年相応の、一人の女の子だった。

頭を上げると、夜が明けそうだった。アイネは泣いた後、眠ってしまった。帰るタイミングを逃したので、そのままベッドの側にいたら意識が落ちたらしい。アイネの顔を見ると、穏やかだった。また叩かないと起きないのだろう。信用されているのか何なのか、こ

れはこれで複雑だ。

伸びをしたら体が痛かった。開けっ放しの扉から外に出て、庭へ向かった。

庭の真ん中に、石碑がある。俺は石碑の前に座りこむ。

「遅くなって、ごめん」

返事はない。

「ごめん」

昨夜のアイネの姿を思い出す。俺は今でもずっとここに座っている。ここから動ける日は、きっと来ない。

『ミリア』

石碑の文字を、目で追った。

家を出て、馬車に乗って、大きな街に着いた。軍の本部がある都市には全然近付いていないが、馬丁から耳寄りな話を聞いたのだ。

「いやあ、お客さん運がいいですよ。今日は軍事パレードがあるんですよ。しかも今日だけ」

願ったり叶ったりだ。ハインがいるのかどうかは知らないが、何か情報がつかめるかもしれない。

人ごみに流されていたアイネの腕を引いた。アイネは目を伏せる。先程から宿屋を探しているのだが、パレードのせいでどこも満室だ。

「何かあった？ 昨日」

ジークが小声で俺に言った。

「別に何も」

「だってアイネの部屋にいたじゃん」

「知ってるなら聞くなよ」

思わず大声でつつこんでしまった。アイネがこちらを見る。俺は首を横に振る。「何でもない」

「ちゅーしたの？」

アイネから隠れるように、ジークが小声で言う。

「してない」「レオンうるさい」

叫んだらジークになだめられた。誰のせいだ。

「ジーク、レオン、宿屋」

アイネが横を指差す。よく考えてみたらアイネはポーカーフェイスだ。アイネにとって昨夜のことは、ほんの些細な出来事にすぎなかったのかもしれない。それはそれでちよつとシヨックだ。

そう考えて、自分の考えに驚いた。今朝、墓参りに行ったばかりではないか。考えてはいけない。

「空いてた」

いつの間にかジークは宿屋で空室を聞いてきてくれた。

「でも三人で一部屋だった」

ジークはアイネを見る。

「大丈夫。これ以上探してもきつと見つからないだろうし」

ジークは俺を見て小声で言う。「ごめんな。俺、夜はいなくなるから」もうつつこむ気も起きない。

部屋には机と、椅子と、ベッドがあった。床で寝なくても大丈夫だ。

「じゃあパレード見てくるから、待ってて」

「行つてらっしゃい」

アイネと目が合った。アイネはいつもと同じように、俺を見ていた。

道は既に人の壁ができていて、交通整理の軍人達が道に溢れる人々を必死に押さえていた。観客は皆、手に国旗を持っている。俺は人の壁から少し離れた位置でパレードを待った。

パレードが始まると、プラスバンドと、式典用の軍服を着た軍人達が行進して目の前を通りすぎていった。皆、笑顔で国旗を振っている。風船をたくさんつけた戦車がゆっくりと通りすぎていく。何だろう、この脱力感。

肩を叩かれた。驚いて振り返ると、人差し指が頬に突き刺さった。振り返り際に人に仕掛ける、あれだ。色々な意味で、俺は言葉を失った。

俺とよく似た男が立っていた。同じくらいの背丈、黒い軍服、黒い髪、違うのは目の色の濃さと髪の長さ、歳くらいだ。それくらい、俺達はよく似ている。

「久しぶりだな」

ハインは、笑顔で言った。

「久しぶり」

まさか本当に会えるとは。いくら何でも都合がよすぎないか？

休戦した直後だから、約十年振りか。俺は十二歳で、ハインは十九歳だった。

「見違えたな。でもすぐに分かった。俺とそっくりだからな」

ハインはようやく俺の肩から手を離れた。何で普通に肩を叩くだけにしなかったのか、聞くに聞けない。

「出ないのか？ パレード」

俺は言った。

「風船をつけた戦車には乗りたくない」

さっきの脱力系戦車のことが。

「考えたのは俺だけだな」

お前か。つつこみたかったが、言ってよいものか分からなかった
ので、言えなかった。十年振りだからなのか、とても話づらい。
話しづらいのは十年という時の流れのせいだと信じたい。

「神官にはなれたのか？」

「今、勉強してる」

「何で学生がこんなところにいるんだ？」

そこまで考えていなかった。「ちよつと用事があった」

「怪しいな。女か」

何で俺のまわりはこういう奴等ばかりなのか。

「父さんと母さんが心配してた。一度も帰ってないのか？」

言ってから、俺が家にいた四年前まで、ハインは一度も帰ってき
たことがないと気付いた。

「今は特に忙しくてな。金だけはきちんと送ってるが」

「開戦するのか？」

ハインはうつすら笑う。

「するよ」

ああ、そうだ。思い出してきた。十年前、ハインは今みたいに笑
ったのだ。

「人を探してる。見かけたら教えてくれ」

ハインは言った。

「誰を？」

「トウーシャ」

ハインの濃い青い目が、笑った。

「過去から転送してきたんだが、座標を間違えたらしくてな。丁度、神学校のあたりに飛ばしたと思うんだが、どうだ？」

この男は、何を言っているのだ？

「やっと見つけた」

ハインの後ろから人影が現れる。黒い軍服に、黒髪を後ろで一つにまとめた女性だった。

「お戻りくださいな。大佐」

女性は俺を見て、微笑んだ。

「あら、本当に会いにきてくれたのね。翻訳機の調子はいかがかしら」

そこで俺は全てを悟った。完全に、謀られた。

「大佐の弟さんでしたっけ」

「俺の若い頃にそっくりだ」

「そうですね、こうして見ると似てますね。さあ行きましょうか。大将がお怒りですよ」

「まいったな」

ハインは俺を見て、笑う。

「レオン。俺は軍人になって、世界を変えろと言った。お前は神官になって、罪滅ぼしをしろと言った。その答えを見せてくれ」

ハインは歩き出した。振り返って、言った。

「お前の友達に、よろしく」

黒い軍服が人ごみの中に消えていった。俺は膝をついた。立てない。脚に力が入らない。無理矢理立ち上がると、脚が震えていた。早く、逃げなければ。

走っても脚が前に進まない。宿屋のまわりには人がいない。階段

を駆け上がって扉を引くと、鍵がかかっていて、思い切り金属音が響いた。

「ジーク、いるのか？」

鍵が開く音がして、扉が開いた。ジークが顔を出す。

「何かあったのか？」

俺は部屋の中に入る。軍人は、いない。アイネは椅子に座って紅茶を飲んでいた。不思議そうな顔で俺を見る。

「お帰りなさい」

脚が折れた。床にへたりこむ。

「どうしたんだよ」

「いや、無事なら、いい」

アイネが紅茶を置いて側へやってくる。なぜ軍人が来ていないのだろう。全部俺の勘違いだったのか？

「何か分かった？」

ジークが言った。

「ハインに会った。駄目だ、謀られた」

息が切れて上手く喋れない。

「よく分からない」

アイネが言った。

「ハインともう一人軍人がいて、宝石店の女だった」

ジークは顔に手をあてた。

「そんなに前から監視されてたのか？　まずいな」

言ってから、ジークは首をかしげる。

「何で誰も来ないんだ？」

「そつだよ。だから急いで戻ってきたのに」

「一、アイネを呼んだのは軍じゃなかった。二、女が誰にもアイネのことを喋ってない。三、知ってるけど放っておいてる。四、アイネが怖い」

「アイネを呼んだのは、軍だ。後で話す。とにかく逃げないと」
ジークは腕を組む。

「逃げなくても大丈夫かもよ？ 現に今、誰も来てないし。今から逃げて夜になる方がまずい」

そういうものののだろうか？ ジークの言葉が飲みこめない。

「仮に来たとしても、アイネなら全員倒せるよ」

それは俺も思ったが、そんな悠長な考えでよいのだろうか。

「アイネは？」

俺はアイネを見上げる。エメラルドの瞳が、細くなる。

「殺していいなら」

ジークは大きく息を吐く。

「決まりだな。今日はここにしよう」

「アイネに、殺してほしくない」

俺は言った。エメラルドの瞳は、細い。

「ありがとう。でも、もう何人でも変わらない」

エメラルドのトゥーシャの瞳は、とても冷たかった。

俺は立ち上がった。脚が固まっている。明日は筋肉痛だろう。

「分かった」

椅子に座った。ジークとアイネも座る。

「ごめんなさい」

アイネは小さな声で言った。

「心配してくれてありがとう。大丈夫だから」

アイネは下を向いていた。声は、冷たくなかった。俺は頷いた。

「何があった？」

ジークが口を開く。

「パレードを見てたら、ハインに声をかけられた」

「監視されてたってことかな」

「トゥーシャを探していて、過去から転送してきたけど、座標を間違えて神学校のあたりに飛ばしたって言ってた」

ジークが目を細くする。

「まさに、それだな」

「後は、宝石店の女が軍服で出てきた」

「ハインと知り合いだったのか？」

「見た感じ上司と部下って感じだった」

ジークは眉を寄せる。

「レオンの予想が的中してたってことか」

思い出したのだ。十年前、なぜ軍人なのかと尋ねた時、ハインはうつすら笑って、言った。

『世界を、壊したいんだ』

絶対にアイネを渡す訳には、いかない。

「軍にこれ以上近付くのは危ない、と。どうしようか、これから」

軍は過去から人を転送してきたのだから、逆の方法も知っているはずだと思っていた。けれどこちらの手の内が知られている以上、軍と接触する訳にはいかない。

「魔術師、あたってみる？ あんまり期待できないけど」

ジークが言う。

「知り合いに魔術師協会のやつがいるから、会っただけ会ってみようか」

「そうだな」

正直、これからどうすればいいのか分からなかった。人を過去に転送する方法を、誰が知っているというのだろう。

「じゃあ明日、朝一の馬車で移動な」

俺は頷いた。

鍵の開く音がした。扉を見る。全員、部屋にいる。もう遅い。

「邪魔するよ」

開いた扉の向こうに、俺によく似た男と、見知った顔の女が立っていた。俺もジークもアイネも椅子から立ち上がる。

「遅かったな」

俺は言った。

「メイベルが見物客に巻きこまれてな。俺もドミノ倒しになりかけた」

「大佐も私も、人ごみに慣れていないの」

メイベルと呼ばれた女は微笑んだ。

「君が、トウーシャか」

ハインはアイネに目を向ける。アイネの目は、細い。

「話は聞いている。初めまして。ハイン・マグダラスだ」

「殺されに来たの？」

ハインは声を出して笑う。

「怖いお嬢さんだな。勘違いするな。遊びに来ただけだ」

「アイネは渡さない」

ハインは俺を見る。頷いて、手を打った。

「お前の女つて、トウーシャか。手が早いな。まだ会ってから一週間もたつてないのに」

「最近の子は何事も早いんですよ」

メイベルが言う。

「俺も年をとつたな」

つつこむにつつこめない。というか、こいつら本当は馬鹿なのか？

「用がないなら帰ってくれ」

「だから、遊びに来たと言ってるだろう」

「捕まえにではなく？」

ジークが言う。

「個人的に遊びに来ただけだ」

「どうして」

「遊びに来るのに理由が必要なのか？ 大変だな」

「何で捕まえない？」

ジークが聞かないので、俺は言った。ハインは濃い青い目で俺を見る。

「そのうち分かる」

これ以上、まだ何かあるのか？ ハインはアイネを見る。

「遊ぼう。アイネ」

アイネはまだ手の平を向けない。

「死にたいの？」

「死なないよ。お前こそ俺をがっかりさせるな」

ハインがアイネに近付いていく。俺は足を踏み出す。足に痛みが走って、声を上げる。足元で、長い銀色の鎖が冷ややかな音を立てる。

「駄目よ」

メイベルが銀色の鎖を手にとって、微笑んでいた。

「大佐たつての一騎討ちなんだから。帰ったらまた大将に怒られなくちゃいけないし」

「アイネを傷付けたら、困るのはそっちなんじゃないのか」

「別に殺す訳じゃないもの。大佐は殺されかねないけど」

意味が分からない。本当に、遊びに来たというのは本当なのか？

「ハインが死んだら困るのはあんた達だろ？」

「だから私はやめろって言ったのに。言い出したら聞かないんだから」

ハインとアイネはまだ接触していない。アイネの手は下ろされたままだ。ハインは足を進める。二人の距離が一メートルを切る。アイネが手を向ける。

『二ーロ』

アイネの手から炎が溢れる。ハインは炎を避けて、アイネの目の前に詰め寄る。アイネが横に跳ぶ。

『マヴェエオ』

黒い球体がハインに撃たれる。ハインは逃げることもせず、右手を球体へ向けた。白い手袋をした手に球体がぶつかり、火花が散る。ハインが手を閉じる。手袋の中で、球体が握り潰された花のように、散って、消えた。

『黒の空 隕 宙 塵 熱 光年経て地に近付き』

アイネは早口でまくし立てる。ハインが走る。

『以って頭に降り注げ』

ハインがアイネの両手首をつかんだ。アイネは目を見開く。すぐに瞳が細くなる。触れ合っている部分から光が発せられて、消える。

アイネの手が、震えている。

ハインはアイネのみぞおちを蹴り上げた。呻き声が、上がる。アイネの体が崩れて、ハインはつかんでいた手を離れた。

「呪文が使えないと、トウーシャもただの女か」

ハインは床に倒れたアイネを見下ろして、言った。ハインがこちらへ来る。俺は手を向けていた。

「お前も遊んでほしいのか？ レオン」

ハインはうつすら笑った。

『命ずる 原子を読み知とする 知を組み成型する』

とても小さな声が聞こえた。ハインが床を見る。

『知と原子は等しくあれ』

ハインがアイネに手を伸ばす。アイネは顔を上げる。ハインの首をつかむ。

『放て デルディウス』

アイネの手から白黒の光が走る。光がハインの全身に広がる。悲鳴が、上がる。ハインは顔を歪めて、床に膝をつく。崩れ落ちる。

『黒の空 星 宙 塵 光 年月裂きて道筋露わに』

アイネは手を離さない。メイベルが走った。

『以て頭に降り注げ ラルベルク』

白い手袋をしたメイベルの手が、アイネの右手をつかんで引き離す。触れた部分から光が現れて消える。

『二ーロ』

アイネは左手で炎を撃った。メイベルは顔の前で炎を握り潰した。

『黒の空 隕 宙 塵 熱』

メイベルはつかんでいたアイネの手を突き放す。

「大佐、起きて」

ハインの体に肩を貸して立ち上がる。

『光年経て地に近付き 以って頭に降り注げ ザフバクト』

近距離から撃たれた光は、ハインの手の中で弾けて消えた。

「さすが、トウーシャだ。見事、だ。楽しませてもらったよ」

『黒の空 星 宙 塵 光 年月裂きて道筋露わに』

アイネは立ち上がりながら、ハインに手を向ける。

「相当嫌われたらしいな」

「何のんきなこと言ってるんですか。早く」

「また会おう。アイネ」

『以て頭に降り注げ ラルベルク』

撃たれた呪文は、扉から出ていくハインの手の中で、綺麗に弾けて消えた。階段を降りる音が消えていった。

アイネが手を下ろした。呪縛から解かれたように、体が動いた。アイネに駆け寄る。

「怪我は？」

「大丈夫。蹴られたただけだから」

「ごめん、何もできなかった」

「別に、レオンが謝ることじゃない」

心が澱でいっぱいになる。ジークを見る。

「ジーク、大丈夫か？」

ジークは顔を上げる。

「ごめん、ちよつと、安心してた」

アイネはあまりしつかりしていない足取りで歩いて、椅子に座った。

「大丈夫か？」

「呪文を、もらってもいい？」

俺は頷いた。差し出した手を、両手で包まれた。

『透の地 回 時 気 以って御身に降り積もれ ノゼリオ』

アイネの手に光が吸い込まれる。「ありがとう」アイネは手を離れた。ジークがこちらに来る。

「逃げるか？」

俺は言った。

「大丈夫だと思う。今度は」

ジークは言った。「ごめん」

「別に、ジークも悪くない」

アイネは言った。

「殺せなかった」

とても小さな声で呟いた。ハインの手首をつかんだ時と同じ、殺す者の目をしていた。俺は、何も言えなかった。

アイネは石段に座って空を見ていた。月が出ている。空気が冷たくて、星も綺麗だ。声をかけなかったら、このまま気付かれないのだろうか。近寄っていくと、アイネはこちらを向いた。驚いていないようだった。気付かれていたのかもしれない。

「何してるの？」

アイネが言った。それは俺が聞きたい。

「アイネが出ていくのが見えたから」

アイネは興味がなさそうに空へ視線を戻した。アイネの側まで歩いて、少し間を空けて隣に座った。石段は冷たかった。昼間、パレードが通った道に、今は誰もいない。

「何してるの？」

アイネに尋ねた。アイネは俺を見た。

「寝れなかったから出てきただけ」

「寒くない？」

アイネは宿屋のネグリジェ姿だった。「寒くない」

「そういえば、月はアイネの場所と同じなの？」

昨夜聞いたが通じなかった質問を思い出した。アイネは頷いた。そういえば今は翻訳機をしているのだと気付いた。

「そういえば、昨日、ごめんなさい」

昨夜のことだろうか。若干酔っていたとはいえ、自分の行動を思い出して恥ずかしくなった。体が熱い。

「いや、ごめん」

何だかよく分からないが謝っていた。アイネは膝をかかえて俺を見ている。

「ホームシックだったの?」「少し」アイネは空を見る。「空が同じだから」俺に視線を戻した。

「レオン、お兄さんに似てる」

「ハイン?」

「違う。私のお兄さん」

アイネの家族の話聞くのは初めてだ。

「顔が?」

「顔は全然似てない。ちょっと、雰囲気」

昨夜、アイネにとって俺は兄代わりだったのか。そう考えると少し残念だった。

「帰りたいの?」

アイネは頷いた。

「死んでしまうのに?」

そのまま、うつむいた。

「ずっとここにいたら、歴史が狂ってしまう」

分かっている。分かっている、けれど。

「どうして抱きしめたの?」

一瞬、自分の耳を疑った。アイネは俺を見ていた。言えというのか? 今、ここで?

「そうしたかった、から」

変な汗をかいてきた。

「どうして?」

知っていて言わせようとしているのか、本当に分からないのか。答えなんて、一つしかないだろうに。

「好きだから」

アイネの目を見て、言った。エメラルドの瞳が開かれる。唇が、薄く開く。アイネの目がそれる。頬が赤い。

「本当、に?」

「本当に」

「どうして?」

「いや、それは分からないけど」

アイネは泣きそうに顔を歪ませる。

「だって、私は」

終わりまで聞かず、アイネを抱きしめた。アイネの頬に手をあてて、唇で唇をふさいだ。

分かっているのだ。だから、聞きたくない。

俺は、自分の中の禁忌に、触れてしまった。

体の痛みで目が覚めた。なぜかベッドではなく、壁際にいた。窓から差し込む光が眩しい。すがすがしい朝だ。ただ、ものすごく体と頭が痛い。

よく見るとアイネが赤い顔でこちらに手を向けていた。一気に血の気が引いた。何かしてしまったのか。とりあえず服は着ているし、アイネも着ている。

昨日は朝一でパレードのあった街を出たが、ジークの知り合いがいる町までたどり着けず、途中で馬車を降りることになった。ここについたのが夕方、ジークと一緒に夕食を食べたのは覚えているが、その後がまったく思い出せない。一体、何をしてしまったというのか。

「アイネ、ご、ごめん」

とりあえず謝っておいた。アイネは赤い顔で、手を向けながら俺を睨んでいる。

「あの、何をしたのか思い出せないの、よかったら教えて下さい」
アイネは手を下ろして、枕元で何か探している。強ばった表情で俺を見て、俺の方へやってくる。殴られないだろうか。アイネは俺の前でしゃがみこんで、自分の左耳を叩く。

『翻訳機がない』

枕元を指差して、もう一度左耳を叩く。

『ない』

「翻訳機なくしたの？」

俺は立ち上がった。頭がすごく痛くて、視界が揺れた。もしかして知らないうちにアイネに殴られたのだろうか。アイネがいたベッドの周辺を探してみたが、翻訳機は見つからない。

「ジーク起きろ。翻訳機がなくなった」

俺は寝ているジークの肩を揺さぶった。ジークは薄目を開ける。

「翻訳機がなくなった」

俺はもう一度言った。ジークははつきりと目を開けた。

「それは、困るな。泥棒かな」

「鍵かかってるけど」

俺は窓と扉の鍵を確かめた。ジークは上体を起こした。

「軍人の女が取り返しに来たとか」

ジークが言った。

「今更？ あいつらが欲しいのは翻訳機じゃなくてアイネじゃないのか」

「そうだな。じゃあ泥棒かなあ」

どこからともなく猫の鳴き声が聞こえた。足元を見ると、全身真っ黒の猫がアイネの足元のまわりを歩いていた。宿屋の女将さんが飼っている看板猫だ。どこから入ってきたのかと思ったら、扉に付いた猫用の小さい扉の鍵が開いていた。猫は特別人懐こい訳ではないが、人見知りする訳でもなかった。昨日も遊んでもらった。猫は可愛い。

「まさか、お前か」

ジークは黒猫を抱き上げた。猫は鳴いた。アイネが穏やかな表情で猫の喉を撫でた。昨日も見えていたが、猫は好きらしい。

あながち猫が翻訳機を持っていた可能性も否定できないので、後で猫の寝床を調べてみようと思った。確か玄関の近くにあったはずだ。

「さて、どうしようか」

ジークは猫を膝に乗せてベッドに腰かけた。

「アイネ、昨日どこ行っただの？」

俺は窓の外を指差した。実はここに着いてすぐ、もう日も落ちるというのにアイネは出かけてしまったのだ。危ないから一緒に行こうかと言っただが、断られた。やっぱり嫌われてしまったのだろ

うか。夜はあまり記憶がないのだが、アイネは俺達と顔を合わさずに部屋に戻ったらしい。

アイネが俺を見ている。当然、質問の答えは、ない。

「ここらへんを探して、なかったら外に探しに行こう」

俺は言った。猫がジークの膝から下りて、小さい扉の向こうに消えていった。

『ちゃんと枕元に置いたのに』

アイネは窓の外を見て、不満そうな顔をした。

「じゃあ行ってくるからな」

ジークは玄関の寢床の中で丸くなっている猫の頭を撫でた。部屋にも、廊下にも、玄関にも、猫の寢床にも翻訳機はなかった。外で落としたとなると絶望的だ。それでも探さない訳にはいかない。なにしろ俺とジークの給料一生分だ。

アイネは分かっているのか、迷う様子もなく歩き出した。昨日どこへ行ったのか気になっていたが、まさかこんな形で分かることになるとは。店も開いている時間なので、街にはちらほら人が行き交っていた。アイネは店の前で立ち止まって、指差した。

「ここ？」

扉を開けると、控え目なベルの音がした。「いらつしやいませ」若い女性の店員がいた。女の子が好きそうなアクセサリー類がたくさん置いてある。

「この中に紛れた、とか？」

ジークに尋ねた。ジークは肩をすくめた。

「昨日いらして下さった方ですよ。こんにちは」

店員がアイネに話しかける。アイネは答えない。通じていないのだから当たり前だ。店員は俺を見る。

「彼氏さんですか？」

「違います」

なぜそうなるのか。アイネに通じていなくてよかった。

「プレゼントですか？」

店員は気にしない様子で続ける。

「いや、プレゼントではなくて」「ご自分用ですか？」「いや、自分用でもないです」店員は笑顔を崩さない。プロか。

「落し物を探してるんですけど。金色で羽の形の、赤い宝石がはまつた耳にかけるやつ」

俺は言った。店員は首をひねる。

「そういった物はお預かりしておりませんね。似た形の飾りならこちらになりますけど」

店員は赤い別珍のテーブルクロスの上に乗ったアクセサリーを指す。

「いや、それはいいです」

俺は首を振った。ジークに耳打ちする。

「隠してるとか？」

「それはどうだろうなあ。宝石の高い安いなんて素人には見分けつかないし」

俺はアイネを見た。意見を聞きたいのだが、通じない。翻訳機が見つかったら、簡単な古代語を教えてもらおう。

結局、翻訳機はなさそうだということで店を出た。アイネはやっぱり分かっているのか、何も言わずに歩き始めた。昨日まで喋れていたのに、通じないと複雑な気分だ。同時に、あの小さな翻訳機がなくなっただけでコミュニケーションがとれなくなってしまうという関係の脆さに、少し悲しくなった。

アイネは立ち止まって、店を指差した。『ここ』看板から察するに、武器屋のようだった。なぜ武器屋なのか。扉を開けて店に入ると、大柄な、筋肉隆々で坊主頭の、いかにも武器屋の主人という男がカウンターに立っていた。男はアイネを見て笑った。

「昨日のお嬢ちゃんじゃねえか」

男は俺を見た。睨まれている。怖い。

「このひよろいのは、何だ。彼氏か？ もっとこう、地に足が沈ん

でるくらいのやつじゃないと俺は認めんぞ」

つつこみどころがたくさんありすぎて何も言えない。とりあえず、違いますとは言っておいた。

「あの、昨日彼女はここで何を？」

俺は言った。男は俺を睨む。怖い。

「武器について色々語り合った訳だが、女なのに大したもんだ。お前が相手なら絶対殺されるだろうな」

それはもつともだ。というか、やっぱり冷やかしかったのか。

「後は手袋のことについてやけに聞かれたな」

「手袋つて、軍人の手袋ですか？」

「そうだ。何で分かるんだ。テレパシーか？」

「いや別にそういう訳では」

確かにアイネが手袋のことを疑問に思うのは不思議ではない。うる覚えだが、触れた物の魔力を吸いとって飛散させてしまうものだったはずだ。上位層の軍人は皆持っている。ハインは俺より魔法が使えなかったはずだから、アイネの呪文を消し去ったのはほぼ手袋の力だ。やはり六万年前にはなかったのだろうか。

「結局、何の用なんだ」

男が言った。

「落し物を探してるんですけど、金色で羽の形をした、赤い宝石がはまった耳飾り」

「そういうものはないな。落ちてりやすぐ分かる」

即答か。確かにこの人はアイネの落し物を隠す感じには見えないが、人は見かけによらないと言うし、どうしたものか。俺はジークを見た。ジークは我関せずで、武器を見て回っていた。俺はアイネを見る。アイネは不満そうな顔をしてうつむく。

『枕元に置いたのに』

何だかよく分からないが、ご不満のようだ。これ以上いても無駄だと思い、店を出た。

アイネは何も言わずに歩き出した。俺とジークは後についていく。

「見つかるのか？ 翻訳機」

俺は隣のジークに言った。

「諦めなければ夢は叶うって、レオンのお母さん言ってたじゃん」
それは根本的に間違っている気がする。俺達が今見なければいけないのは現実だ。

「案外レオンがすっかり持ってたたりするんじゃないの？」

すっかりとは一体どういうつつかりなのか。アイネが立ち止まった。俺は店に目を向ける。明らかに、酒場だった。どんどん行く場所が男らしくなっているが、気のせいかな。

「駄目だよ、一人でこんなところ来ちゃ。変なのに絡まれるよ」

ジークがアイネに言った。アイネはジークを見たが、通じてはいないようだ。アイネなら絡まれても平気なのではないかと思ったが、そういう問題でもないと言わなかった。

「まだやってないな」

ジークが立て看板を見ながら言った。店が開くのは夕方からのようだ。まだ昼すぎなので、かなり時間がある。

「一度戻るか」

ジークが言った。夜の酒場にはあまり近付きたくないが、仕方ない。ジークが歩き出すとアイネも歩き出した。二人についていく。アイネは歩きながら路面の店を見ていた。甘いお菓子の香りがする。人々がパラソルの下の円い机で何か食べていた。クレープのようだ。

「食べる？」

俺はクレープ屋を指差してアイネに言った。アイネはクレープ屋を見て、俺を見た。

『食べてもいいの？』

何だか食べたそうなので、ジークを呼んで食べることにした。メニューが立て看板に書いてあるが、そういえばアイネは読めないのだった。

「アイネ、どれがいい？」

一応、メニューの看板をさして聞いてみた。アイネは看板を見て、俺を見た。

『任せる』

よく分からないが、アイネはそれ以上何も言わないので、一番女の子っぽいものを注文しておいた。苺と生クリームだ。できたての三角クレープを持って、パラソルの下に座った。「いただきます」ジークがクレープをかじる。俺もクレープを食べた。バナナとチョコレートだ。結局、アイネは苺と生クリームでよかったのだろうか。恐る恐るアイネを見た。アイネは俺を見て、少しだけ微笑んだ。

『おいしい』

笑ったところをあまり見たことがなかったので、驚いた。甘いものは人を幸せにするのか。そういえばのんびりするの久しぶりな気がする。アイネと会ってからそろそろ一週間がたつが、色々なことがあって、あつという間だった。

「おい、お前、昨日の女じゃねえか」

とても場違いな太い声がした。大柄な男と小柄な男がアイネの側に立っていた。二人とも腰に剣をさしているので、剣士か傭兵か。アイネをかなり睨んでいるので、友好的な関係ではなさそうだ。アイネは男を見て、クレープを食べ始めた。

「この野郎、無視かよ」

小柄な男が言った。

「あの、彼女は昨日何を？」

男二人に睨まれた。怖い。今日は睨まれる日なのか。

「何だてめえは。この女の男か？」

大柄な男が言った。何で皆そうなるのか。

「いや、食い逃げとかだったら謝罪しないといけないんで」

「別に食い逃げじゃねえよ」

大柄な男の言葉から勢いがなくなる。

「酒場でアイネに絡んだけど、返り討ちにされた？」

ジークがクレープを食べながら言った。男達の顔が赤くなってい

く。まさかそんなベタな。「この」小柄な男がジークの腕をつかむ。

『透の水面 水 気 以て我が手に溢れ出せ』

ジークは小柄な男に手を向けて、笑った。

『オスタ』

ジークの手から激しい水流が放たれて、小柄な男を吹っ飛ばしていった。通行人に当たらなかつただろうか。大柄な男が舌打ちする。「全員魔術師か」服装は明らかに魔術師なのだが、気付かなかったのだろうか。アイネは意外にも驚いた顔でジークを見ていた。ジークが呪文を使うのは珍しいからだろうか。大柄な男は俺を見て、アイネを見て、ジークを見た。「畜生」大柄な男は走り去っていった。周りの客から拍手が起こった。

アイネはうつむいて口を押さえていた。笑っている。ジークも笑い出した。俺もつられて笑った。

夕方になって酒場に行ってみたが、翻訳機は見つからなかった。

「もう一回ここらへん探してみようか」

ジークは今朝アイネが寝ていたベッドの下をのぞきこんだ。アイネもあまり機嫌はよくないようだが、ベッドの下をのぞきこんでいる。

猫の鳴き声がした。黒い塊が床に置いたトランクの中に頭をつっこんでいる。猫を抱き上げると、猫の口に金色に光るものがあつた瞬間、体から血の気が引いた。

昨夜、アイネが出かけてしまった後、ジークと宿屋で夕食をとつたのだが、つい同じペースで飲んでしまい、気持ちが悪くなったのだった。そこから記憶が途切れ途切れなのだが、部屋に戻ったらアイネはもう寝ていた。アイネの枕元にあつた翻訳機を見て、どういう訳か盗まれたら困ると思って、トランクの中に入れたような、気がする。

猫が手の中でもがいている。ジークがこちらへ寄ってくる。

「あ、やっぱりお前だったのか？」

ジークは猫を見て、口から翻訳機を取った。

「いや、ごめん。ごめんなさい。すみません」

猫は俺の手の中から逃げていった。さすがに猫のせいにしたら猫に怒られる。ジークがアイネに翻訳機を渡す。

「昨日、翻訳機を見て、盗まれたら困ると思って、この中にしまったような気が、というかしまりました。すみません」

俺はトランクを指して言った。ジークが笑い出した。

「そっぴいかなり酔ってたもんな。部屋まで送ろうかって言ったけど、覚えてる？」

俺は首を振る。そのあたりの記憶はまったくない。今朝、頭がとても痛かったのは間違いなく二日酔いだ。

「だから枕元に置いたって言ったのに」

アイネが言った。とても睨んでいる。

「いや、ごめん、本当に」

謝るしかない。猫がアイネの足元を回って、一声鳴いた。

「まあ、見つかったし、クレープも食べれたし、よかったじゃん」

ジークが言った。大変申し訳ないが、もう一つ聞いておきたいことがある。それによって俺の生死が決定されるとしても、聞かなければならない。

「あのアイネ、俺、今朝何したの？」

起きたら壁際にいて、アイネに手を向けられていた、あれだ。アイネはやっぱり俺を睨んだ。

「起きたらレオンが隣で寝てた」

もう、無理して酒を飲むのはやめようと思った。

夜になってしまったので、出発は明日ということになった。夕食はなぜかアイネの希望で酒場になった。酒場が好きなのだろうか。アイネを向かいにして、ジークの隣に座る。客達が思い思いに騒いでいる。店内も明るいし、静かに楽しむ場所ではなさそうだ。俺は酒場なのに水を頼んだ。昨日の今日でさすがに飲めない。

「こういうところ、好きなの？」

ジークが骨付き肉をかじりながら言った。

「特別好きじゃないけど、来てみたかったから。昨日はあんまりいられなかったし」

あの大柄な男と小柄な男のことだろうか。

「アイネのいた場所は、こういうところなの？」

俺は言った。アイネは考えるように首をひねる。

「知らない人がたくさん集まるところは、ない。村だからみんな知ってるし」

「昔つて、今と変わらないの？」

アイネは眉を寄せる。考えているようだ。

「多分、そんなには」

「馬車とかあったの？」

ジークが尋ねる。

「見たことはなかったけど、聞いたことはあった」

トウーシャが絶滅した六万年前から、今の人種が誕生した一万年前の間の歴史は解明されていないので誰も分からないのだが、六万年前と今はそんなに違わないらしい。

「でもこっちの方が道具が発達してる。これとか、手袋とか」

アイネは翻訳機を指しながら言った。

「手袋つて、ハインの？」

俺は言った。アイネは頷いた。そういえば聞こえと思っていてことを思い出した。

「トウーシャは警戒心が強いのか？」

「どうして？」

「いや、最初に殺されそうになったなと思って」

「危害を加えるものは殺さないと、殺されてしまうから」

「戦争中だったの？」

ジークが言った。アイネは頷いた。

「隣の村と」

もしかして、十年前の侵略戦争と似ているのかもしれない。誰かが戦争に勝つためにカタリナを召喚して、トウーシャを絶滅させてしまったのだろうか。

「カタリナはトウーシャが嫌いなの？」

俺は尋ねた。アイネは目を伏せる。

「憎んでいると思うけど。カタリナ様を裏切ったのは私達だからトウーシャが創造主を殺そうとしたあたりのことだろう。」

「でも自分が創ったものを、随分あっさり嫌いになるんだな」

「子供に裏切られたら、誰でも嫌になるんじゃない」

子供がいないのでよく分からないが、そういうものなのだろうか。

「猫好きなの？」

俺は言った。アイネは怪訝な顔をする。突然話が変わったからだろうか。

「好きだけど」

「猫って昔からいたんだ」

アイネは頷く。

「犬もいたけど、猫の方が好き」

「俺はどっちも好きだなあ」

ジークがサラダを食べながら言う。そういえば、話してばかりで料理をほとんど食べていない。アイネが机の脇にあったメニューを取り上げて、メニューを見て、俺に差し出した。

「お昼に食べたやつって、どれ？」

「お昼って、クレープのこと？」

「あの甘いやつ」

苺と生クリームのクレープか。俺はアイネの手からメニューを受け取った。そういえば、文字は読めないのか。普通に喋っているから忘れていたけれど、翻訳されるのは言葉だけらしい。

「クレープはないけど、一番近いのはこれかな。苺のパフェ」

「パフェって何？」

「アイスとか生クリームとか入ってるやつ」

「とりあえず頼めば？ すみません」

ジークが店員を呼んだ。

「苺のパフェ一つ。スプーンは二つで」

「何でスプーン二つなんだよ」

「あれ、半分こするんじゃないの？」

ジークは素なのか確信犯なのか分かりかねる。

パフェが運ばれてきた。アイネは目の前の、白いアイスに苺が乗ったパフェを見て、静かに目を輝かせていた。やっぱり甘いもの好きなのか、ちゃんと女の子だ。アイネが俺を見る。

「別に俺は食べないから、全部食べていいよ」

「あーんってしてもらえよ」

アイネの周囲の温度が下がる。

「すみません。何でもないです」

ジークは謝罪した。アイネはパフェのアイスをすくって一口食べた。

「おいしい？」

アイネはこちらを向いて、少しだけ微笑んで、頷いた。幸せそうな顔をしているアイネを見て、とても、可愛いと思った。

アイネが眠そうに目を瞬かせているので、宿屋に戻ることにした。

「俺はもうちょっと飲んでく」

ジークは言った。本当に飲みたいのか、気を利かせたのか分からないが、アイネと先に戻ることにした。空は星が出ていて、月は少し欠けていた。道にはもう誰も歩いていない。

「寒くない？」

俺は言った。

「寒くない」

アイネの足取りはしっかりしていた。ワインが苦手なだけで、その他の酒には強いのかもしれない。

「あの、連れ回しちゃってごめん」

「甘いものが美味しかったから、もういい」

不名誉すぎて穴があつたら入りたかった。

「古代語、教えてもらえないかな。簡単なやつ」

「どうして？」

「翻訳機がないと完全に通じなくて困るから」

「それは私がこっちの言葉を覚えた方がいいんじゃないの？」

それは考えていなかった。宿屋に着いた。もう遅いので玄関を静かに開けると、猫が寢床からこちらへ顔を向けた。奥から声が聞こえたので、まだ他の宿泊客が食堂にいるようだった。

部屋に入ると、アイネは一番端のベッドに腰かけた。

「古代語は眠いから、明日ね」

アイネは投げ出した足を揺らした。

「でも、呪文は古代語なのよね？」

エメラルドの瞳が俺を見上げる。

「そうだけど、あれは日常会話には使えないよ」

アイネはうつむく。ゆっくりと瞬く長い睫毛は、家でよく見た、花にとまり羽を開閉する夜光蝶に似ていた。

「何も言わないの？」

アイネは言った。

「何が？」

アイネは俺を見上げて、またうつむいた。

「何でもない」

そのままベッドに倒れた。寝るつもりだろうか。

「何？ 気になる」

「何でもない」

アイネはシーツに顔をうずめた。

「気になる」

「何でもない」

このままでは決着がつかないので、俺はアイネの脇腹をくすぐった。

「や、レオン、嫌」

アイネがあまりにも大きな声を出したので、あわてて自分の口に指をあてたら、足で腹を思い切り蹴られた。痛みでベッドの脇にうずくまる。アイネと目が合う。とても、近い。

そうだった。思っていることを、伝えたのだった。アイネは目をそらした。俺は立ち上がった。体が熱い。

「今日は、別のところで寝てね」

一気に嘔き出してきた恥ずかしさに、俺は顔を押さえた。

「いや、ごめん、本当に」

「もういい」

怒ってはいないようだった。俺は真ん中をあけて一番端のベッドに横になった。

アイネに、伝えなくてはいけないことがある。けれど、伝える勇気がない。

俺は、アイネに胸の底の泥を告白する光景を、何度も見た。

馬車の中は静かだった。車輪の音しか聞こえない。いつもは根掘り葉掘り聞いてくるジークも、今日は静かだ。どうかしたのだろうか。

6

昨夜は眠りが浅かった。考え事をしていて、同じ夢を何度も見た。「レオン、着いた」

アイネが馬車の外で俺を見ていた。どうやら寝てしまったらしい。アイネは今日もポーカーフェイスだ。ジークが外で伸びをしていた。「じゃあ、まず道場に行くか」

ジークは言った。町並みは、町というより村だった。民家と畑が交互に並んでいる。

「地元？」

俺はジークに尋ねた。ジークは頷く。

「寮に入る前までここに住んでた」

そういえばジークが寮に入る前の話はあまりしたことがなかった。

「ここ」

ジークは立ち止まって建物を指差した。集会場のように見える。

「実家？」

「違うよ。魔術師協会の道場。俺の実家に行ってどうするんだよ」

それはそれで少し行ってみたかった。ジークは中に入っていく。

かけ声と、火花が弾けるような音が大きくなってくる。

広い部屋で何人かの男達が組になって呪文の撃ち合いをしていた。ジークは部屋の中に入って、壁に背をつけて腕を組んだ。誰もこちらに気付かない。不法侵入者が来たらどうするのだろうか。

呪文の撃ち合いを見ていたら、一人の男がこちらを向いた。

「ジーク？ 久しぶりだな」

金髪の男だった。男は撃ち合いをやめて、こちらに来る。「久しぶり」ジークは片手を上げる。金髪の男は俺の方を見る。

「友達？」

ジークは頷く。

「レオン・マグダラスです」

アイネは俺の陰に隠れるように立っていた。

「アイネ・リルンです」

「カノ・エリオスです。よろしく」

金髪の男は言った。声で気付いたのか、他の男達もこちらにやって来る。十人くらいだが、全員ジークと同じ年頃のようにだ。

「久しぶり」

「里帰り？」

「友達？」

男達が俺とアイネを見る。ジークは頷く。俺とアイネはもう一度、名前を言った。

「二人は付き合ってるの？」

誰かが言った。俺は言葉に詰まった。付き合っていない。いない、が。アイネは何も言わない。いつもなら真っ先に否定するのに、変な沈黙が流れる。

「何しに来たんだ？ 里帰り？」

カノがジークに言った。

「いや、ちょっと聞きたいことがあって。誰か、人を過去に転送する方法を知らないか」

男達は互いに顔を見合わせる。

「どうして？」

カノが言った。

「後で説明する。とにかく知ってるか、知らないかだ」

ざわめいていた男達が静かになる。

「人を過去から転送する研究だったら、つい最近までやってた」カノが言った。

「本当ですか」

俺は言った。「何で？」ジークがカノに尋ねる。

「軍から召集がかかったんだ」

「いつ？」

「一年くらい前かな」

「今もやってるのか？」

カノは唇をとがらせる。

「研究メンバーの入れ替えて外された」

「過去から人を転送するのって、具体的にどうやるんだ？」

「秘密保持契約書にサインしたから、言えない」

カノは言った。ジークは厳しい目でカノを見た。

「そんなこと言ってる場合じゃないんだ。この子は実際に過去から転送されてきたんだよ」

ジークがアイネを指す。カノはアイネを見る。

「本当に？」

「本当に。自分が研究してたものが信じられないのか？」

「なぜ？」

「知らされなかったのか？」

カノは頷く。契約書を取るくらいだから、用心して知らされなかったのだろう。

「戦争に軍事兵器として投入するためだ。多分」

「その女の子を？」

ジークは答えない。迷ったのだろう。

「トウーシャだ」

小さな声で言った。

「でも、それで国が勝つなら」

「アイネは兵器じゃない」

俺は叫んでいた。この男は本気でそう思っているのか？ これ以上暴言を吐くようなら、容赦はしない。

「すまん、軽率だった。申し訳ない」

カノはきまりが悪そうに目を伏せた。

「具体的に、どうやって転送するんだ？」

ジークが言った。

「装置がある」

「その装置で人を過去に転送することはできないのか？」

「できない。過去から人を転送してくるところしか、プログラミングされていない」

「その逆をプログラミングすれば、できる可能性はあるんだな？」

カノはわずかに頷いた。「多分」

ジークは俺を見た。俺は、何も言うことができなかった。

ジークはトレイの上のティーセット一式を机の上へ置いた。今日は部屋が二つ取れたが、今はアイネも同じ部屋にいる。

「ちよつと用があるから、先に飲んで」

ジークは言った。

「どこ行くの？」

野暮だとは思ったが、聞きかかったので聞いてしまった。

「病院」

思っていた答えと違った。てつきり心に決めた人とやらに会いに行くと思っていたのだ。

「お見舞い？」

「彼女に会いに」

不躰な質問をしてしまったことに気付いた。病気なのだろうか。

「ごめん」

ジークは穏やかな顔をしていた。

「いい。二人には言っておくよ。植物人間なんだ」

そう言つて、部屋から出ていった。

胸の下の方に、重い泥のようなものが沈んでいくようだった。俺は、何も言えない。ティーカップに紅茶を注いだ。

「飲む？」

アイネに尋ねると、アイネは頷いた。俺はカップに紅茶を注いで渡した。アイネは紅茶を飲んだ。俺も紅茶をストレートのまま飲んだ。

「これから、どうしようか」

アイネは紅茶へ目をやった。答えはない。ジークが帰ってきたら相談しよう。

鐘が鳴っていた。教会の正午の鐘だろう。

「アイネのところに教会はないの？」

「教会って何？」

そういえばカタリナがいなくなつてからのトゥーシャは無宗教だったということに気付いた。

「教会はお祈りするところだけど。あと歌ったりする」

「何の歌？」

「カタリナを讃える歌？」

アイネは紅茶のカップを机に置く。

「聞きたい」

しまった。言うんじゃなかった。

「聞かない方がいいと思うよ」

「別に音痴でもいいから、聞きたい」

アイネがこちらを見ている。逃げられそうにない。俺は息を吐いて、口を開いた。

偉大なる創造主カタリナ 汝の慈悲深い愛で、我等を守り給え
我等を悲しみから救い給え 我等の栄えはいつも 汝と共にあらんことを

自分ではよく歌えた方だと思った。アイネが先程と同じ目で俺を見ている。やはり下手だっただろうか。

「オルタナ様は出てこないのね」

「誰？」

「創造主」

俺は首をかしげる。

「カタリナじゃなくて？」

アイネは首をかしげる。

「創造主はオルタナ様とカタリナ様じゃないの？」

創造主が二人いるなんて、聞いたことがない。

「アイネのところでは二人いるの？」

アイネは頷く。どこかで歴史が歪曲してしまったのだろうか。

「ここでは違うの？」

アイネは言った。

「みんなカタリナしか知らない」

アイネは頷いた。

「オルタナ様は生で、カタリナ様は、死」

アイネは紅茶に手を伸ばした。カップが倒れて、机が濡れた。

「大丈夫？」

アイネは倒れたカップを起こす。椅子から立ち上がって、ふらついて床にしゃがみこんでしまった。俺はアイネの側にしゃがんだ。

「ごめんなさい、何か、体がだるくて」

疲れが出たのだろうか。無理もない。アイネの背に触れようとすると、やめた。アイネは俺から目をそらした。頬が赤いような気がする。

「ごめん」

俺はなぜか謝ってしまった。

「何が？」

アイネは俺を見ない。

「その、色々」

何を言っているのか自分でもよく分からなくなってきた。俺は立ち上がろうとした。アイネに腕を引っ張られた。アイネは赤い顔をして、泣きそうな目で俺を見ていた。アイネが俺の胸へ体を寄せてくる。名前を、呼ばれた。

「死ぬのは、怖い」

俺は動けなかった。アイネを抱きしめるのは簡単だ。けれど、それはとても安直だ。駄目なのだ。俺はアイネの元へ行くことは、できない。

アイネの頭が肩にあたった。俺はアイネの肩をつかんで体を離した。アイネは目を閉じていた。頬に涙が伝っていた。

扉が開く音がした。俺は立ち上がろうとして、床に吸い寄せられた。重い物が倒れる音がする。何も見えない。

「ごめん、本当に、ごめん」

ジークの声が、聞こえた。

頭が痛い。体を起こすと、吐き気がして景色が揺れた。机の上にカップが二つ残っている。床にアイネの帽子が落ちていた。本当なのか？ 本当に？ 俺は立ち上がった。気持ちが悪い。

外は暗くなっていた。俺は馬車呼んだ。

「どちらまで？」「軍の本部まで」馬丁が値段を言った。ポケットを探ると、その時初めて、財布がないことに気付いた。

扉を開けたカノは驚いた顔で俺を見た。

「お金を、貸して、下さい」

先程噛み付いた相手に金を借りるお願いをするなんて、とても間抜けだ。けれどここでは他に知り合いがない。道場に行ったらカノは家に帰ったというので、家を訪ねたのだ。

「何で？」

至極もつともな質問だ。説明するのも面倒臭いのだが、金を借りようとしている手前、まったく説明しない訳にもいかない。

「ジークに財布をとられた。追いかけていからお金を貸してもらえるとありがたい、です」

カノは眉をひそめる。

「本当に？」

どう考えても怪しいのは俺の方なので、その反応は当然だろう。

「色々あってアイネを連れていかれた。多分追いかけられないように財布をとっていったんだと思う」

「アイネってあの女の子？」

俺は頷いた。

「三角関係？ いや、そんなはずは」

「違う。ジークはアイネを軍に引き渡しに行ったんだ」

カノは首をかしげる。

「どうして？」

そんなの俺が聞きたい。カノは腕組みをする。

「ジークと付き合いは長いの？」

「まだ一年しかたってない」

カノは頷いた。

「一年あれば充分だ。いくら必要なんだ？」

「本当か？ すまない。軍の本部へ行けるくらいなんだが」

俺はさっき馬丁に言われた金額を言った。「たっか」カノは俺の手に紙幣を握らせた。

「ちゃんと返してくれよ」

「ありがとう。決着がついたら返しにくるよ」

俺は紙幣をポケットに入れた。

「一つ聞いてもいいか？」

俺は言った。

「何？」

「言いたくなかったらいいんだけど、ジークの恋人はいつから病院に？」

「何だ。そこまで知ってるのか。十年前、休戦間際に流れ弾に当たって、それから、ずっと」

俺は頷いた。

「ジークも、連れ戻してくるよ」

カノは微笑んだ。

「よろしく」

カノに礼を言って、俺は今度こそ馬車に乗った。

黒い、高い建物を見上げた。正面まで歩いていくと、鉄柵の前に軍人が二人いた。

「ハインに会わせて下さい」

「何だお前は」

軍服の親父が言った。

「一般人は立ち入り禁止だ」

若い軍人が言った。

「じゃあ赤毛の男が来たかどうか教えて下さい」

「そんなことは知らん」

鉄柵の向こうから、誰か来る。

「お通ししなさいな」

二人の軍人が敬礼する。

「随分遅い到着ね。王子様」

メイベルは鉄柵に手をかけて、微笑んだ。

「ジークは来たんだな」

「夕方頃には。立ち話もなんだから、お上がりなさい」

メイベルが鉄柵の鍵を指で弾くと、柵は横に開いた。メイベルは黒い建物の中に飲みこまれていく。暗い長い廊下を歩き続けて、扉の前で立ち止まった。扉が開く。

人が想像する未来のような部屋だった。黒い壁に緑色のモニタの光がたくさん並んでいる。黒い床と壁の隙間が、青白く光っている。遅かったな。王子様」

ハインがうつすら笑った。隣にはジークが顔を伏せて立っている。部屋の奥には年配の軍人が二人、腕組みをして立っている。

床から天井まで続く円柱の硝子ケースの中に、両手首を合わせて鎖で吊るされたアイネがいた。アイネは疲労した顔で俺を見ていた。「軍人だったのか？」

俺はジークを見て言った。ジークは顔を上げる。悪びれた様子は一つもない。

「軍人ではない。ハインと取引してた。トゥーシャを連れてきたら、彼女の治療費を一生分出してくれるって」

「いつ？」

「一年前」

ジークが神学校へ来たのは一年前だ。最初から全部仕組まれていたのか？

「宝石店で監視されてたのも、宿屋にハインが来たのも、全部お前が知らせたのか？」

「それは違うわ」

メイベルが言った。俺は後ろを振り返った。

「宝石店で待ち伏せしたのは私がトゥーシャを見たかったから。大佐が宿屋に行ったのは、トゥーシャと一騎討ちがしたかっただけ。

私達は彼の手伝いなんて一度もしたことがない。ただ、会話と居場所は分かっていただけ。ごめんなさいね」

メイベルは髪を耳にかけて、左耳を指差した。ジークがつけていたものと同じ、小さな琥珀色のピアスが見えた。

「レオン。俺は、俺とお前どちらが正しいのか試したかった」

ハインが言った。

「ミリアのために世界を壊そうとしている俺と、祈るお前のどちらが正しいのか、天に任せてみようと思った。ゲームだよ。この男と取引をして、軍がトゥーシャを捕まえたらお前の勝ち、男がトゥーシャを俺に引き渡せば俺の勝ちだった。結果は、見ての通りだ」

なぜ軍がアイネを捕まえれば俺の勝ちなのだ？ どちらも同じではないか。

「意味が、分らない」

「困ったな」

ハインはこちらに近付いてくる。

「確かにトゥーシャを神学校に飛ばしたのは悪かった。ハンデが多

すぎたかもしれない」

「大佐、座標のずれは事故だと聞いていたが？」

坊主頭で顔に髭を生やした男性が言った。

「トウーシャは今ここにいるのだから、いいではないですか。大将」
ハインは振り返って言う。俺の目の前で、足を止める。

「ミリアは、俺を選んだ」

『世界を、壊したいんだ』

十年前のハインの言葉が、フラッシュバックした。

俺は家の扉を開けた。

「ただいま、お姉ちゃん」

ミリアはこちらを振り返って、笑った。「お帰り」長い黒髪が揺れて、夕げの香りがした。俺はミリアに今日の稼ぎを渡した。ミリアの手に硬貨が落ちる。

「偉いわね、レオン。今日もよく頑張りました」

ミリアは頭を撫でてくれた。扉が開く音がして、俺とミリアは振り返る。

「お帰りなさい。随分早いね。珍しい」

「今日はお偉いさん達が来るからさっさと帰れだよ」

ハインは俺を見て、笑った。「ただいま」「おかえり」俺はなるべく元気よく言った。ハインはミリアの手の中に硬貨を落とした。俺より多い。

「もうできるから、待ってて」

ミリアは俺達に笑いかけて、鍋を見に行った。

夕食はほとんど具のないスープだった。それでも、食べ物があるだけありがたいと思う。三人で夕食をとるのは久しぶりだ。机の上で短くなった蠟燭の炎が揺れていた。隙間だらけの狭い家は、夏は暑く、冬は寒い。

ハインは十九歳で、ミリアは十八歳で、俺は十二歳だった。ハインは同性だからか、父代わりというよりは兄として感じていたが、

ミリアは姉というより母だった。俺は金属拾い、ハインは軍人の手伝い、ミリアは人の家の食器洗いをして暮らしていた。ハインは呪文が使えたので、軍人達と仕事ができるようになったらしい。俺の方が呪文を使えるから、俺も軍人の手伝いをする。とハインに言ったことがある。

「あいつらの前では絶対に呪文を使うな」

ハインは俺の頭に手を置いて、言った。

「あいつらと一緒にいると、気分が悪くなる」

ハインの顔や体の傷は、日ごとに増えていった。

蒸し暑い日だった。俺は金属拾いで少しばかりの金をもらって、家へ向かっていた。戦況が悪化していて、国は欠片でもいいから金属を欲しがっていると、いつも金属を買い取ってくれるおじさんが言っていた。

俺は家の扉を開けかけて、手を止めた。

「あいつらが来る前に、早く」

扉の隙間から聞こえたハインの声は、苛立っていた。俺は反射的に扉の横に身を隠した。

「どういうこと？」

ミリアの声が聞こえる。

「軍人がお前を捕まえに行くって、さっき」

「どうして？」

「俺のことが気に入らないからだ」

靴の音が聞こえる。

「待ってハイン、逃げるって、どこへ？」

「どこでもいい。とにかくここから逃げないと」

「そんな。レオンは？」

「後から迎えに行く。早く」

「駄目、レオンを置いていけない。それに、どこへ逃げるっていうの？」

「そんなの後から考えればいいだろ。捕まりたいのか？」

ハインの怒声が聞こえた。「嫌」ミリアが叫ぶ声と、何かを叩く乾いた音がした。静かになった。

「ごめん、なさい」

ミリアの声は聞き取りづらく、震えていた。靴音と、床がきしむ音がする。ミリアの小さな悲鳴が聞こえる。

「そんなに逃げるのが嫌なら、あいつらのものにはならないでくれ」
大きな物音と、ミリアの悲鳴が聞こえた。静かになった。

「どういう、こと？」

ミリアの声は震えていた。

「ハイン？ 嫌、やめて」

物音がする。ミリアは叫んだ。何かが割れる音がした。

「嫌だ、ハイン、嫌」

叫び声が、悲痛になっていく。俺は耳を塞げなかった。ミリアの叫び声は止まない。

絶叫が聞こえて、静かになった。俺は立ち尽くしていた。扉が、開いた。ハインが立っていた。ハインの顔には細い傷がたくさんあって、ハインは、笑っていた。俺はハインに腕を引かれた。俺は叫んでハインの手に爪を立てたが、傷がついても、手は離れない。

割れた窓から、夕陽が差しこんでいた。ミリアは床に倒れて宙を見ていた。頬は濡れていて、白い肌が夕陽で橙色になっていた。

「レオン、お前も、ミリアが好きだろ？」

ハインにミリアの側まで連れていかれる。

「お前も、ミリアを取られるのは嫌だろ？」

不謹慎にも、俺はミリアの叫び声に欲情していた自分に気付いた。
「ミリアは俺達のものだ」

ハインの声が聞こえた。俺は、ミリアの中で、果てた。

日が落ちた頃、ミリアは家に入ってきた軍人達に連れていかれた。ハインはナイフで軍人に切りかかったが、軍人達はハインを暴行し

た。俺は隅でうずくまって歯をならしていた。

「無駄な足掻きをしゃがって」

「まあ若い女をもらえたんだし、いいんじゃないのか。早くしないとこいつの傷がやばい」

「二度と俺達の前に現れるなよ」

血が流れる腕を押さえた軍人と、目が合った。別の軍人がこちらに来て、俺の腹を蹴り上げた。息が止まる。気付くと、ミリアと軍人はいなくなっていた。俺はハインの側へ行った。ハインは気絶していなかった。体のいたるところに赤黒い痕ができ、顔は腫れ上がっていた。恐ろしい形相で宙を睨んで、涙を流していた。俺は闇医者を呼んだ。ハインは一日眠り続けた。

ハインは目を覚ますと、ミリアを探しに行くと言った。俺はハインについていった。空には星が出ていて、細い月が見えた。駐屯地に近い路地裏の入り口で、ハインは立ち止まった。

ごみの山の上に見えたのは、体液にまみれ、腹を原型が分からない程に刺され、腸を引きずり出された、ミリアの姿だった。

数週間後、国は隣国と協定を結び、休戦した。

俺は庭の石碑の前に座って、目の前の花畑を飛ぶ夜光蝶を眺めていた。ここではもう明日の食事の心配もしなくていいし、自分で金を稼ぐこともない。

「何でハインは軍人になるの？ 嫌いじゃなかったの？」

隣に座るハインに尋ねた。

「嫌いだ」

ハインは言った。

「じゃあ何で？ あいつらお姉ちゃんを殺したのに」

俺は石碑を見て、ハインを見た。暗かったが、ハインはうつすら笑った。

「ミリアを殺した世界を、壊したいんだ」

「俺の勝ちだ」

ハインの声で、俺は過去の記憶から意識を戻した。

「違う。お前も俺も同罪だ」

俺は叫んでいた。

「知ってるよ、そんなことは。だから全員一緒に死ねばいい」

ハインは銃を抜いた。俺に、銃口が向いた。ハインは歩いてきて、銃口を俺の喉へつけた。とても、冷たい。ハインは振り返った。

「アイネ。カタリナを呼べ」

エメラルドの瞳が開いた。

「どういうことだ、大佐」

大將が叫ぶ。

「ありがとうございます、大將。あなたのおかげでトゥーシャの召喚準備がスムーズに進んだ。軍事兵器の案を取り合ってくれたのはあなただけでしたからね」

「どういう、ことだ」

俺は言った。ハインは俺を見た。

「まだ分からないのか？ お前のところに大司教をやったのは、軍だ。軍がトゥーシャを連れ帰れば俺には手が出せない。そうなれば軍事兵器として使われる。けれどももし男がトゥーシャを連れ帰れば、俺がカタリナの寄り代として使うということだ」

世界を壊したいといったハインの姿が、蘇った。

「お前、そういうことだったのか？ 軍に復讐するためにアイネを呼んだのか？」

俺は叫んでいた。ハインは笑った。

「軍じゃない。世界にだ」

「大佐、説明しろ」

大將が叫んだ。ハインは大將を見た。

「簡単に言えば、仇討ちです」

「誰のだ」

「妹のです」

「貴様、気が狂ったか」

ハインは鼻で笑った。

「狂っているのはあんた達だ。戦争にかこつけて妹を強姦して殺した。休戦があと少し早ければ、ミリアは死なずにすんだのに」

ハインの叫び声は、反響して消えた。大將は銃を抜く。ハインへ銃口を向ける。

「あなたが撃つなら、俺は先に弟を撃ちますよ」
大將は動かない。

「さあアイネ、選べ。愛しい男が目の前で死ぬのを見るか、カタリナを召喚して全員道連れにするか。どちらにしろ、レオンは死んでしまうがな」

「呼ぶな。駄目だ。アイネ」

叫んだ。硬い金属が喉にあたる。アイネは泣きそうな顔をしている。結局、俺は彼女を泣かせることしかできない。

銃声が聞こえた。俺はハインに突き飛ばされていた。大將の銃口が、見えた。目の前を黒いものが遮って、俺は黒いものと一緒に、倒れた。

俺はすぐに上体を起こした。

「お前、何で、そういうところだけ持つていくんだよ」

自分の声が震えていることに気付いた。目の前で倒れているジークは俺を見上げて、言った。

「俺は彼女が生き続けてくれれば、それでいいんだよ」

黒い服だから、どこに当たったのか分からなかった。

「裏切ったんなら最後まで裏切れよ、馬鹿」

ジークは、笑った。俺は胸倉をつかまれた。ハインだった。銃口

が左肩に押し当てられて、音と、焼ける匂いと、痛みが走った。ハインの手が離される。景色がゆっくり動いている。濃い青い色の目は、とても冷たい。

アイネの顔が見えた。見開いたエメラルドの目が、こちらを見ていた。格好悪い。結局、助けられない。背が床について、俺は天井を仰いだ。

ハインが、俺の口の中に銃口をねじこんできた。冷たい、金属の味がした。

『無の古』

ハインはアイネの方を見る。口元が笑っている。

『一全素源生の彼方幾星霜』

大将ともう一人の軍人が銃を硝子ケースへ向ける。銃声は響いたが、硝子ケースは割れない。叫びたいのに、口が動かない。

『死せる魂繋ぎ止め 以って我が身に降り給え』

アイネは、俺を見た。泣きそうな顔で、微笑んだ。

『オルタナ』

光があつた。俺は目をつぶった。硝子の弾ける音がした。目を開くと、割れた硝子ケースの中にアイネが立っていた。アイネはあたりを見回した。左目は赤く、右目は青かった。

『カタリナでは、ないのか？』

ハインが苛立った声で言った。確かにアイネはカタリナとは言わなかった。赤と青の目のアイネは、こちらを向いて、微笑んだ。

『オルタナだ』

ハインは眉をひそめる。

『そうか。今の子等は私を知らないのだったな。創造主だ』

『創造主は二人いるということか？』

『そうだ。これはカタリナとの共同作品だ』

『なぜオルタナを呼んだんだ？』

ハインは呟いた。

『誰も死なせたくないからだ』

聞こえていたようだ。オルタナは言った。

「苦肉の策だ。トゥーシャにとって、生き続ける苦しみより、死んでしまう悲しみの方が大きかったのだろう。どちらにしろ世界は壊れてしまふけれど」

ハインは銃を俺の口から抜いて、立ち上がった。

「アイネ」

俺は叫んだ。

「トゥーシャには聞こえない。私はもう私だ」

ハインはオルタナに近付いていく。

「お前も世界を壊すのか？」

「この世界では誰も死なない」

一瞬、雷のような光が点滅したように見えた。

「お前の一番会いたい者に会わせてやろう」

オルタナは手を横にかざした。俺は瞬きをした。

オルタナの手の先に、あの日、路地裏で見た、左半身が白骨化した以外は何も変わらない、ミリアがいた。ミリアはハインへ近付いていく。半分になった口が笑っている。ミリアは腐り落ちた手で、ハインの頬に触れる。

「久しぶりね。ハイン」

息の音が漏れていた。半分、肉がないからだ。ハインは濃い青い目を見開いて、ミリアを見ている。

「どういう、ことだ」

ハインの声は震えている。ミリアは微笑んで、ハインの腰にささっていたナイフを抜いた。銀色の刃が光る。

「それはつまり、こういうことね」

ミリアはハインの腹に、ナイフを刺した。ナイフを、抜いた。血潮が弾け飛ぶ。ハインは床に膝をついて、崩れ落ちた。銃声が響く。軍人達がミリアに向けて銃を撃っていた。

「馬鹿ねえ。話を聞いていなかったの？」

ミリアは軍人達に近付いていく。弾切れの音、弾を交換する音が

する。ミリアは軍人の腹にナイフを刺して、抜いた。血が噴き出した。

「これから大切なのは、死なないようにすることではなくて、傷を負わないようにすることよ」

大將が叫びながらミリアの胸に自分のナイフを突き立てる。

「痛みなんて、すぐに慣れるわ」

ミリアは胸にナイフを刺したまま、大將の腹を刺して、ナイフを抜いた。血潮が飛んだ。ミリアがこちらへ歩いてくる。

「あなたは何もしないの？」

問いかけは、メイベルに向けられたものだと思いついた。

「私は見守るように言われているわ」

ミリアは興味がなさそうに「ふうん」と言った。俺の側へしゃがみこむ。むせる程の腐臭と血の匂いがする。十年前と同じ姿の、肉だけが腐り落ちた、ミリアがいた。

「レオン？ 大きくなったわね。あなたのことは許してあげる。まだ子供だったものね。ハインに撃たれたの？ 可哀想に。後でゆっくり話しましょう」

ミリアは半分しかない口で笑った。俺から離れていく。下げたナイフの刃先から血が滴り落ちた。

「起きて、ハイン。気絶するなんてまだ早いわ」

ミリアは床に倒れているハインの胸倉をつかむ。ハインは、濃い青い色の目を見開いた。

「ミリア、どうして」

「あなたは、間違ったことをしたわ」

「何で、ミリア」

ハインは泣き出しそうな目をしていた。ミリアは子供をあやす母親のように、微笑んだ。

「あなたも軍人も、大嫌い」

ミリアはハインを床に打ち捨てて、ハインの腹にナイフを刺した。ナイフを抜いて、また刺した。肉に刃が刺さる音がする度に、ハイ

ンの呻き声が上がった。

「痛いかしら。痛いでしょう？　ハイン。でも私はもっと痛かったの。痛かったんだから」

ミリアは、笑った。笑い声を上げて、ハインの腹を刺し続けた。傷口から肉がえぐれて血と混ざり合っていくのを見た。血を浴びたミリアの横顔を見た。見開かれたまま動かない濃い青い目を、見た。俺は倒れたまま、床に吐いていた。喉が焼ける。胃液がこみ上げてくる。涙が出た。

オルタナの声が聞こえた。笑い声が大きくなっていく。

「死ぬるということは幸せなのだぞ？　傷を負えば血が出る。けれど体が腐っても、死なない。私はカタリナとは違う。子等よ、一人残らず壊れるがいい」

オルタナは歩き出した。俺の側を通り抜け、メイベルの横を通って部屋から出ていった。メイベルが駆け寄ってくる。「大丈夫。貫通してる」メイベルは俺に呪文をかけた。

「ジークを」

メイベルは頷く。俺は上体を起こした。景色が歪む。肩が、痛い。「カタリナの呪文を覚えてくれ」

メイベルは俺を見た。

「まさか創造主が揃う日が来るなんてね」

胸ポケットから紙と白い手袋を取り出して、俺の手へ握らせた。俺は立ち上がった。扉は見えているのに、体が真っ直ぐ進まない。

「レオン、どこへ行くの？」

ミリアの声だった。振り返ると多分倒れてしまっているので、振り返らなかつた。

「好きな人を連れ戻しに」

刺されるかもしれないと思った。それでもよかった。

「そう」

ミリアは言った。諦めたような穏やかな声だった。

俺は扉を開いて、アイネの元へ向かった。

暗い廊下を歩きながら、メイベルにもらった紙を広げた。古代語の上に呪文の意味と、読みが振ってあった。

『無の古　一　全　素　源』

俺は小さな声で読んだ。

『幻世の彼方幾星霜　伝わる魂繋ぎ止め』
目を閉じた。

『以って我が身に降り給え　カタリナ』

光があつた。白以外何も見えない。自分の手も、体も見えない。もしかして目で見ているのではないのかもしれない。

「子よ、なぜ呼んだ」

声が聞こえた。低い、若い女性の声だった。

「オルタナを止めたい」

「なぜだ」

「大切な人を取り戻したいから」

音がなくなった。

「オルタナが何をしようと私には関係のないことだ。あれが世界を壊すなら、私は召喚に応じない」

「トウーシャを憎んでいるから？」

「特別トウーシャだけではない。出来損ないのお前達もだ」

出来損ないとは現代人のことだろうか。

「自分の創ったものを簡単に嫌いになるんだな」

「勘違いをするな。お前達は我々が創った訳ではない。寄り代にもならぬ子など誰が創るものか」

「現代人で他にカタリナを召喚したやつがいたのか？」

「出来損ないは、皆死んだ。もういいだろう、子よ。お前もオルタナに壊されるといい」

声が遠くなっていく。俺は見えない手で空をかく。

「駄目だ。アイネだけは救ってくれ」

「戻れ。もうよい」

「愛せよ。自分の子供だろ？」

俺は叫んだ。何も聞こえなくなった。

「子よ」

女性の声があった。

「お前は馬鹿なのか？」

「馬鹿じゃない」

静かになった。どれくらい時間が経ったのか分からない。

「よい」

声の相手が笑ったような気がした。

「気が変わった。お前の戯言に少しだけ付き合ってやろう。ただしオルタナにも同じことを伝える。よいな」

目の前が、黒くなった。

扉を開けた。黒い部屋の機械のパネルの上に、オルタナは退屈そうに座っていた。赤と青の目がこちらを見た。オルタナは嘲笑する。

「何の真似だ、カタリナ」

「退屈しのぎに子の戯言に付き合ってやろうと思ったただけだ」

口が勝手に動いた。

「まさか子に従属するとは、そこまで堕ちたか」

「何とでも言う方がいい。お前にも聞かせてやろう」

オルタナは目を細くした。

「不愉快だ」

俺は走った。体が軽い。オルタナの首めがけて拳を突き出す。金属音がして、オルタナは拳を腕で受け止めた。

「そんな魔力の低い器で、本当に私を殺そうなどと思っているのか？」

オルタナに手首をつかまれる。景色が回転して、壁に背を打ちつけていた。オルタナが歩んでくる。俺は壁に背をつけて動く。

「無様だな。カタリナ」

俺は白い手袋をはめた。オルタナへ走る。オルタナの目の前でし

やがんで、足払いをかける。崩れるオルタナのみぞおちを、思い切り殴った。オルタナが呻いて床に膝をつく。中身はオルタナでも、体はアイネのものだ。傷つけるのは辛い。『器など後でどうにでもなる』カタリナの言葉が聞こえた。

オルタナの両手首をつかむ。振りほどこうと、オルタナの腕が震える。魔力を消してしまえば単純な腕力勝負だ。力なら俺の方が強い。オルタナは笑った。

「子の悪知恵も進歩したものだ」

「アイネを返してくれ」

「私を呼んだのはそのトゥーシャだ」

手を振りほどかれる。胸を殴られた。体が飛んで、壁に叩きつけられる。オルタナは立ち上がった。

「子等よ、お前達は昔からそうだった。創り出したのは我々だということを忘れて、我々を殺そうとした。笑わせるな」

オルタナは叫んだ。

「カタリナ、器を離れる。お前が入っていると傷付けるのに面倒だ」
カタリナは答えなかった。

「あくまでも子に従属するというのか？」

「最初に言っただけだ。お前にも戯言を聞かせてやると」

「よい。ならば私の手で消してやる」

オルタナは俺へ手を向けた。手のまわりに青白い光が集まっていた。俺は走った。オルタナの手の中の青白い光を叩く。見開いた赤と青の目と、目が合った。オルタナの右手に左手が触れる。手を握ったまま、俺はオルタナを抱きしめた。青白い光の欠片は、氷のように溶けて消えていった。

胸を殴られた。痛いけれど、体に穴が開く程ではない。胸を殴られる度、咳こんだ。手は離さなかった。離してしまったら、終わる。

「俺達を愛してほしい」

オルタナの手が、止まった。

「間違っただけかもしれない。けど、もう繰り返さない。だから愛してほ

しい。俺も、あなたを愛すから」

振りほどこうと震えていたオルタナの右手から、力が抜けるのを感じた。

「聞いたか、オルタナ」

カタリナが俺の声で言った。

「子よ」

赤と青の瞳が俺を見た。

「お前は馬鹿なのか？」

「馬鹿じゃない」

俺は言った。カタリナは俺の声で笑った。

「もう私はここに興味はない。オルタナ、お前はこれからどうするのだろうな」

体から力が抜けた。急に痛みが戻ってきて、膝が崩れた。カタリナは、いない。オルタナが俺の前にしゃがみこんだ。俺は目の前の女の子を、抱きしめた。女の子は抵抗しなかった。

ずっと伝えたかったことを、伝えよう。けれどもう、浅い夢の中で見た俺では、ない。

「アイネ、俺は、姉を犯した。許されることじゃない。だから赦さなくてもいい。でも俺は、アイネを、愛してる」

嘘のように、何も聞こえなくなった。衣擦れの音が聞こえて、アイネの体が動いた。

「本当に？」

エメラルドの瞳が、俺を見た。俺は頷いた。

「私がお婆さんになっても？」

「うん」

「世界が壊れてしまっても？」

「うん」

「私が男でも？」

「それは、ちよつと考える」

アイネは微笑んだ。

「私が、ここからいなくなってしまうても？」

俺は頷いた。アイネは、笑った。

「嬉しい」

アイネの輪郭が淡い光を帯びた。アイネは自分の体を見る。

『トウーシャを過去に返す』

声が聞こえた。カタリナなのか、オルタナなのか分からない。アイネは宙を仰いで、俺を見た。俺を見て、微笑んだ。

「また、会えたら嬉しい」

エメラルドの瞳が瞬く。俺は、光に包まれているアイネの両手を握った。知っていた。何と言うべきか、もう決まっている。俺は宙を仰いだ。

「俺も一緒に飛ばしてくれ。こっちから一人消えるくらい、問題ないだろ？」

何も聞こえない。開いたエメラルドの瞳が俺を見ていた。薄く開いた唇から、言葉は出てこない。

『子よ』声が聞こえた。『お前は、本当に馬鹿なのだな』

握ったアイネの両手から、光が俺に伝わった。

「レオン、それは」

アイネの唇が震えている。俺はアイネの頬を撫でた。

「一人より、二人の方が怖くないよ」

「だって」

エメラルドの瞳が濡れている。アイネがあまりにも悲壮な顔をしているので、笑ってしまった。

「さつきも言っただろ。恥ずかしいから、もう言わない」

アイネの瞳に涙がたまっていく。アイネの顔が崩れた。

「私も」

半分、泣き声でよく聞こえなかった。アイネは俺の肩をつかんで、顔を伏せた。いつかの夜のように、アイネは声を出して泣いた。俺は背中を叩いてさすってやった。

部屋の扉の隣に、メイベルが立っていた。俺は手を振った。メイ

ベルは微笑んで、敬礼した。

目を開けると、白かった。窓の外は青い空で、雲が流れていた。寝返りをうつと、肩が痛かった。黒い軍服の、黒髪を後ろでまとめた女性が、椅子に座って林檎とナイフを持っていた。女性は驚いた顔でこちらを見て、微笑んだ。

「おはよう。ジーク・フォンフィリア。気分はどうかしら」

メイベルは言った。

「死ななかったんだ、俺」

「肩にあたったくらいじゃ死なないわね」

メイベルは林檎をむき始めた。

「ここは？」

「病院よ」

「どうなったのか聞いてもいいか？」

メイベルは頷いた。

「レオンは？」

「トウーシャと一緒に消えたわ。文字通りね」

「オルタナは止まったんだな」

「そのようね」

記憶がつきはぎなのだが、レオンが部屋を出て行ったのは覚えてる。

「ハインは？」

メイベルは林檎の皮を切ることなくむいていく。

「死にそうね。生きてるのが不思議なくらい」

メイベルの膝の上に林檎の皮が落ちる。林檎は綺麗にむけていた。「まあ、奇跡的に助かって奇跡的に回復しても、クビでしょうけどね。あの人は一体、軍人以外の何になるのかしら」

メイベルは微笑んでいた。

「もう結婚しちゃえば？」

俺は言った。メイベルは微笑んだまま俺を見た。

「私と大佐はそういう関係じゃないの」

メイベルはサイドテーブルの皿の上で林檎を切った。「うさぎ林檎にしようと思ったのに、間違えたわ」独り言のようだ。

ノックの音がした。メイベルが返事をする。俺は体を起こして扉を見ると、金髪の男が顔をのぞかせた。

「思ったより元気そうだな」

カノは言った。

「何しに来たんだ？」

「冷たいな。お見舞いだって。半分は違うけど」

カノは部屋の中を見回す。

「お前の友達は？」

「レオン？」

カノは頷く。

「お前に財布取られたって言って、馬車代を貸したんだけど」

まさかレオンがカノに金を借りているとは。財布まで取ったのはやりすぎだったか。

「メイベル、レオンは？」

「消えたって言ったじゃない」

「どこに？」

メイベルはあごに手をあてて、上を向いた。

「古代？」

俺は眉をひそめた。

「消えたって、何？」

「だから文字通り消えたって言うてるじゃない。トウーシャと一緒に目の前で消えたの」

「どこへ行ったか分からないってこと？」

「そうね。でもきつと、トウーシャのいた時代へ行っただと思うわ」

メイベルは笑った。

「踏み倒された？」

カノが言った。

「いや、俺が払うよ。いくら？」

カノは、神官の初任給の四分の一の金額を言った。「たっか」俺は思わず言った。

「レオン、あの野郎」

メイベルが林檎をくれた。半月型の林檎に、皮で作った耳が刺さっていた。

「器用だな」

「料理は得意なのよ」

メイベルは林檎をかじりながら言った。

風が高い音を立てていた。崖の下には緑が広がっている。目の前に石碑が二つ立っていて、伸びた草が石碑のまわりで揺れていた。

いつの間にか隣にアイネがいた。何も言わずに出てきたので、何か言われるかと思ったが、アイネは黙っていた。

「綺麗だね」

目の前の景色を見て、アイネを見た。アイネは頷いた。アイネの言った通り、一〇十四年は俺がいた時代とあまり変わらなかった。緑が多かったが、空は同じだった。

「お父さんの稽古が嫌になって逃げたのかと思った」

「ああ、いや、でもあるけど」

俺は頭を抱えた。アイネの家は三人暮らしで、父と、兄がいた。母親はいないらしいが、まだ理由は聞けていない。ここへ飛ばされてすぐアイネの家へ行ったが、アイネの父は俺を見て愕然とした後、怒り狂った。行方不明になっていた娘がどこから来たか分からない男を連れて帰ってきたら、当然だろう。行方不明は必死の説明の末、何とか納得してもらえたが、俺については納得してもらえず、なぜか毎日稽古をつけられることになってしまった。

「でも筋はいいって褒めてた」

「想像できない」

「嫌いだつたらとつくに家から追い出してるもの。私を助けてくれたから、感謝はしてるんだと思う」

本当だろうか。稽古中、飛び交う怒声に、さすがアイネの胸を潰させるだけあるなと思ってしまった。

「あと、お兄さんも褒めてた」

俺と似ているらしいアイネの兄とは、まだほとんど話をしていない。顔は似ていなかったたので、どこが似ているのかよく分からない。アイネが俺の腕をつかんだ。俺は石碑を見た。

「この時代の二人は、俺を知ってるのかな」

「知ってると思う。創造主に時間の流れは関係ないから。歴史は変わらないけど」

風で服がはためく。俺はアイネを見た。アイネは目を合わせて、すぐにそらした。

「何で泣くの」

俺は笑ってしまった。アイネの顔をのぞきこむと、アイネの目に涙がたまっていたって、瞬きでこぼれた。アイネは首を振る。

「悲しいんじゃないから、いいの」

俺はアイネの首を抱いて、額に額を寄せた。

「飛ばされる前、何て言ったの？」

「何のこと？」

「泣いててよく聞こえなかったやつ」

アイネは俺の胸の服をつかんだ。

「恥ずかしいから、言わない」

「じゃあ聞かせてもらおう。一緒に寝てる時に」

アイネは顔を離して、俺の胸を思い切り叩いた。痛かった。

「馬鹿、変態」

アイネは濡れた頬を赤くしていた。俺は笑った。

俺達が滅んでも、人の営みはきつと続く。世界に愛という感情がある限り、ずっと。

7（後書き）

あとがき　く愛して！　ぎゅっとだきしめて！

こんばんは。終わってから大分日がたってしまいました。後書きを書きます。とうとう。ちなみに電車内なので見られたら恥ずかしいです。

気付けば人生で書いたものの中で一番長い話になってました。びっくりですね。ファンタジーをとっても久しぶりに書いたのですが、こんなに楽しかったかと思う程悩まずに書けましたよ。みんな勝手に動いてくれてありがとう。

元々、話を書く時は何かをインプットしてアウトプットするのですが、今回はドラゴンボールとワンピースをインプットしてアウトプットしたらこうなりました。アニメの。どこに面影があるんだと思います。私の脳内フィルターを通ると、ドラゴンボール+ワンピースがらびんぐになります。そんな馬鹿な。というか戦闘シーンが書きたかっただけですね。ヤムチャは出てきませんし。

実は大元のねたは大昔にあって、書き出すと長いのですが書きます。毎年一人年賀状で絵を描いているのですが、その時の絵用に作った設定がらびんぐの大元だったのです。だからレオンとジークは神官なんですよ。ジークは当時のキャラと性格が割と似てます。でも同性愛者の話でした。現在のアイネにあたる人物が男で、現在のレオンにあたる人とくつつくという。（↑ブランカシスパレルのことです。アイネ↓姫那、レオン↓ナーク、ジーク↓雷、です。

2010/7/7追記）

後、らぶ。らびんぐはらぶ+ingなんですよ。英語なんですよ。登場人物全員愛に飢えているんですよ。そして私の中では訳が「愛して！」なんです。らぶらぶ！

後は何ですかね。やっぱり兄^{ハイ}ですかね。書いてる時はそうでもなかったんですが、最近彼が好きです。困った大人みたいな。

彼にはモデルがいるんですが、十年振り？ にモデルの人が出てくる漫画を読んだら、とってもそっくりで衝撃を受けました。いや、真似した訳じゃなく。だって覚えてなかったし！ でも深層心理のどこかで覚えていて、似てしまったようですね……！ 私は変人が好きらしいです。でも付き合いたいかではなく、遠くから愛でるのがいい。彼の過去話をいつか書きたいのですが、いつになるかわかりません。超反抗期時代……！ あと軍服がとっても好きらしい。私が。

後は名前の由来とかなったちゃうんで、もういいですかね。みんなとっても大好きでした。ありがとうありがとう。溢れるらぶで次も頑張りますよ。(改めて加筆修正したら、ジークの苗字を私が間違ってたって覚えていたということに衝撃を受けました。衝撃的すぎでした。ごめんジーク。 2010/7/7 追記)

終わりに、サブタイトルのぎゅっとだきしめては、某クイズ番組でエコマークに書かれている文字は何でしょうという問題で、某芸能人の方が答えたものです。「エコじゃなくてエロじゃん」とつまれていました。好きだったので使わせていただきました。世界を変えるのは愛だ！ ちなみに正解は「ちきゅうにやさしい」です。世界は愛に満ちている。

2009/6/16くらい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7154x/>

ラヴィング

2011年10月21日13時13分発行